

# タイランドエッセイ

## 第2巻



タイランドエッセイ第2巻改訂第2版

第1巻で知った驚愕の事実、感動の15ヶ月！

ついに第2巻です。

そう、微笑みの国タイから、誠実な日本の皆様への発信。

著者：青沼 “まんたん” 祐子

編集：青沼 “ぷんぷん” 修司

## 目次

<b>第1部</b>	<b>結婚証明書</b> .....	1
	タイ 2-1 結婚証明書	
<b>第2部</b>	<b>あやしい建築法はどこもすごい</b> .....	2
	タイ 2-2 コンドミニアムの不思議な建築法	
	タイ 2-3 あやしい建築法はどこもすごい	
	タイ 2-4 電線地中化工事	
	タイ 2-5 PMY ホテルの長期滞在者用コンドミニアム建設	
	タイ 2-6 道路舗装工事	
<b>第3部</b>	<b>作戦は成功したか</b> .....	5
	タイ 2-7 2列のテーブル	
	タイ 2-8 スターボーリング	
	タイ 2-9 作戦その2 バスケットボール大会	
	タイ 2-10 作戦は成功したか	
<b>第4部</b>	<b>まんたん、女学園に行く</b> .....	8
	タイ 2-11 子供たちの瞳	
	タイ 2-12 オン・ビハーフ・オブ	
	タイ 2-13 まんたん、女学園に行く	
	タイ 2-14 握り締める手	
	タイ 2-15 書類を書く	
<b>第5部</b>	<b>コンドミニアムの人々</b> .....	12
	タイ 2-16 コンドミニアムの人々	
	タイ 2-17 オーナー	
	タイ 2-18 ナーママとナー	
	タイ 2-19 レレレのおじさん	
	タイ 2-20 クン・ウドン	
<b>第6部</b>	<b>レディースの流行</b> .....	18
	タイ 2-21 のびやかな仕事	
	タイ 2-22 ぶんぶんゴルフに行く	
	タイ 2-23 床屋さん	
	タイ 2-24 レディースの流行	
	タイ 2-25 ビューティパーラー	

【第2巻】

**第7部 正倉院御物**……………22

- タイ 2-26 日本の人形
- タイ 2-27 阿古耶の松
- タイ 2-28 正倉院御物
- タイ 2-29 花嫁衣裳
- タイ 2-30 青海波

**第8部 ピシッ、ダーン、ズリズリ**……………27

- タイ 2-31 ピシッ
- タイ 2-32 ダーン
- タイ 2-33 ズリズリ

**第9部 ワンス・アポン・ア・タイム**……………30

- タイ 2-34 停電のプリマスホテル
- タイ 2-35 ワンス・アポン・ア・タイム
- タイ 2-36 オールド・ジャーマニー
- タイ 2-37 ラ・カイク

**第10部 クンチャイ再建計画**……………35

- タイ 2-38 ついに生まれた
- タイ 2-39 まんたんの夢
- タイ 2-40 蓮の花のような女の子
- タイ 2-41 驚天の三者会談
- タイ 2-42 大ペンライ
- タイ 2-43 クンチャイ再建計画

**第11部 40歳にして振袖を着る**……………39

- タイ 2-44 オーシャン・マリーナ
- タイ 2-45 レディースのパーティ
- タイ 2-46 リハーサル
- タイ 2-47 40歳にして振袖を着る

**第12部 笑っちゃう銅鐸**……………43

- タイ 2-48 お誕生日の贈り物
- タイ 2-49 淡浮院
- タイ 2-50 嘘でしょう？
- タイ 2-51 笑っちゃう銅鐸
- タイ 2-52 泳げる硯

【第2巻】

- タイ 2-53 太極紋様のある2階
- タイ 2-54 バルコニーの驚愕
- タイ 2-55 最上階やはり
- タイ 2-56 岸壁の仏像

**第13部 ナーママ発熱/クン・ウドン爆発……………48**

- タイ 2-57 送ったお薬
- タイ 2-58 ナーママ発熱
- タイ 2-59 ドイツの博士号を持つ女医さん
- タイ 2-60 クン・ウドン爆発
- タイ 2-61 コーラはいらない
- タイ 2-62 頭のレントゲン

# 第1部 結婚証明書

## タイ 2-1 結婚証明書

これを読んで下さっている方の中で、国が認めた結婚証明書をお持ちの方がいたら、ぜひ、ご一報ください。

まんたんは持っていなかった。いまだに持っていない。これからも持たないと思う。

会社のぷんぷんから電話がかかってきた。

「ねえ、結婚証明書ってある？」

「ぷんぷん、そんなのあるわけないでしょ」

「ジムが滞在許可とるのに結婚証明書が要るんだって言うんだよ」



結婚を証明する写真  
信じてくれない

あわてて作った手製の結婚証明書  
会社の用紙を使用していますが、  
何も証明する価値なし  
結局は戸籍抄本が結婚証明書だった

どう考えても、結婚証明書なんて聞いたことがない。

クンチャイに、パスポートをなくしたときのために取得してきた戸籍抄本と住民票を持たせて、ぷんぷんへ届けてもらった。

結論からいうと事なきを得たのだが、あわや、まんたんは不法滞在者になるところだったのである。

ぷんぷんは、ジムに聞いて、アメリカ風の結婚証明書っていうのを公文書偽造しようかと思ったそうである。

ことわっておきますが、最終的に日本領事館に確認されるので、そんなものを偽造してもだめです。

## 第2部 あやしい建築法はどこもすごい

### タイ 2-2 コンドミニアムの不思議な建築法

建物はできてから、人が入るとするのが、当たり前だと思う。しかし、それは、当たり前ではないのだった。

まんたんとぶんぷんの住んでいたコンドミニアムは、パタヤのホテル並みの料金のまことに結構なコンドミニアムだとお話した。それは事実なのだが、建物は完全にできているのではなかった。

時々、ドンドンとすごい音がしたり、塗料の鼻をつく匂いがして、不思議だとは思っただけけれど、まさか、未完成であるとは考えなかったのである。

ある時、うるさいなあ様子を見に行くと、建設、していたのである。



コンドミニアム、何度みても立派  
どこが建設中？



コンドミニアムの海側、全室、海が見える  
やっぱり、どこが建設中？

下の階は満室だったけれど、上層階は、入居者がありそうだと、サッシを入れ、内装工事をするというのだったのである。

それまでは、吹きっさらしなのである。

驚いて、クンチャイに聞くと、バンコックに住んでいるチャイニーズのオーナーが、経費節約のために、この不思議な高層ビル建築法を採用しているというのだった。

### タイ 2-3 あやしい建築法はどこもすごい

建築法がすごいので、どこでも、信じられないことがおこる。

一緒にパタヤに行く約束をしていたエリザベスの家を訪ねると、ガウン姿のエリザベスが、心底うんざりした顔で、「まんたん、入って！見て！」と言う。

家に入ると、驚天。そこは、水浸しなのだった。それに、臭い。

何がおこったのかと聞くと、エリザベスは居間の脇のトイレにまんたんの手を引いて、行った。トイレの天井が破れ落ちて、そこからまた、汚水が流れてくるのだった。

エクスパッツ担当のジムの奥さん、ラムもメイドさんを連れてやってきた。メイドさんたちは、大海の水を柄杓で汲むごとく、床にたまった水をぞうきんで吸い取ってはバケツに絞るのであった。

目につかないところで、建築はこのほかあやしらしく、管が折れて、天井に水がたまり、天井が支えきれず、この騒ぎとなったらしい。

まんたんは、お手伝いするべきなのだと思ったが、パタヤに1人でいかせてもらうことにしたのだった。

## タイ 2-4 電線地中化工事

ゴルフ場に隣接するリサの家に行ったときのこと。「見苦しいので、電線を地下に埋める工事をしている」というので、窓から眺めたまんたんは、またもや驚天した。

まず、地面をブルドーザーで一筋削り、そこに、電柱からはずした電線を置き、その上に土をかぶせるという大胆な地中化工事だったのである。

はじっこの、道路にぶつかっているところは、そこだけ電柱があり、地中から電線が持ち上がり、道路を渡っている。

まんたんは、これでは、停電は止むを得まいと得心がいったのである。



リサさんの家というか、部屋  
エリザベスさんも同じ形式の部屋

## タイ 2-5 PMY ホテルの長期滞在用コンドミニアム建設

ラヨンで最初に滞在した PMY ホテルの敷地内に、長期滞在用のコンドミニアム棟が建てられ始めた。

PMY ホテルは慣れているのと、トムヤンクンがおいしいので、よく出かけたのだが、その度に、まんたんとぷんぷんは、工事の進捗を見て、笑うしかないのであった。日本なら、まず鉄材、鉄筋がしっかりと組み立てられ、しかるのち、生コンが流され、まっ、そういった手順になると思うのだけれど、違うのだった。

コンクリートの平面ができる。そこの四隅に鉄筋が立てられ、コンクリートをコテで重ねて、壁を作る。その階が終わると、コンクリートの平面をつくる。以下、くりかえし。要するに、積み木細工のようなのだ。したがって、ゆがみが生じる。どう見ても、建物は、壁が斜めであった。

考えられないでしょうが、タイは地震がないので、これで、間に合うのである、と、思う。

## タイ 2-6 道路舗装工事

まんたんの住むコンドミニアムの前の道路が、舗装されるというので、クンチャイは喜んだけど、まんたんは、長いこと工事中で通行が不便になると、少々がっかりした。片側通行とか、通行止めとか、そんなことを懼れたのである。

予感として、長いことかかるんじゃないかと思った。ところが、そんな心配は無用だったのである。

海岸に一番近いその一本道は、1日で舗装されたのである。些か奇異に思われるかも知れない。まんたんは、大いに感動し、拍手を贈りたくなった。

しかしである。素早い工事は当然なのであった。

がたぼこ道に、薄くアスファルトを流し、ローラー車で押し、その上に、海岸からとってきた砂をまくだけなのである。

大丈夫なのだろうか。日本なら、基礎工事をしっかりし、地盤を固め、というところだ。結論からいうと大丈夫ではなかった。

雨季の激しい雨で、アスファルトの下の地盤が崩れ、道には大きな穴があくのである。四輪車はまだいいのだけれど、そこそこで、バイクが転倒し、乗っている人が大怪我をするのであった。

バンコックへ向かうあの幹線道路はどうなのか、クンチャイに聞いてみた。クンチャイは中東で道路工事の仕事をしていた、プロフェッショナルなのだ。イタリアの建設会社が地面を固めて作ったのだそうである。



アスファルト道路、電柱も見える  
向こうに見えるのがコンドミニアム  
すべてが凝縮された写真、見事！

## 第3部 作戦は成功したか

### タイ 2-7 2列のテーブル

ぶんぶんの所属するエリアのパーティがあった。

それまでのパーティはエクスパッツだけか、シニアエンジニアが加わるかするものだったので、大きなパーティだと聞いて、楽しみにしていた。

それまで、パーティに遅れることはなかった。というか、時間に合わせていくと、たいてい早く着いてしまうのだった。というか、みんなそんなに時間ぴったりではなかったのだ。

しかし、そのときだけ、珍しくクンチャイが道を間違えて、遅くなった。大きな、大きなタイレストランで、外からみると、バナナの葉で葺いたタイのおうちのような建物だった。

中に入って、まんたんとぶんぶんは、一瞬、足を止めた。広い体育館のような一間がレストランのすべてで、2列にテーブルがしつらえてあり、その上に食べ物がズラリと並んでいて、レストランの人が、飲み物を配るのであった。

それはいい。いいのだけれど、2つのテーブルは、見事に分れていたのである。ひとつは、エクスパッツ、ひとつはタイスタッフ。言い換えると、欧米人とタイ人に分かれていたのだ。

まんたんとぶんぶんは、最初に、エクスパッツのテーブルに行って、知ってる人たちと話していたけれど、分かれたテーブルは、分かれたままなのであった。

そのうち、家で開いたパーティに来てくれたタイスタッフがビリヤード台のところに集まって、そこでまんたんとぶんぶんは話していたけれど、分かれたテーブルは、分かれたままなのであった。

これではいけないと目と目を合わせたまんたんとぶんぶんは、タイスタッフのテーブルに行って、1人、1人話し始めた。まんたんは名前を覚えなさいといけなさいと、メモ帳片手に懸命であった。懸命に話した。



これはタイ再訪時のタイ人パーティ後の記念写真  
こんな具合にはならなかった、2列のパーティ

しかし、他のエクスパッツは、決して、タイスタッフのテーブルに来ることはなかった。タイスタッフも、エクスパッツのテーブルに来ることはなかった。

今でも思い出す。2列に分かれたテーブルとその間のビリヤード台とそこにいる日本人の不思議さを。2つのテーブルを廻るのは日本人だけであったという不思議さを。

## タイ 2-8 スターボーリング

ぶんぶんは、これではいけないと、考えた。

日本でこういうパーティがあったら、形だけでも上司がお酌して回るのだそうである。考えて、自分のエリアでボーリング大会を開催することにした。もちろん、エクスパッツとタイスタッフの双方が参加するのである。

ついでに、まんたんも参加した。

ラヨン唯一のボーリング場、スターボーリングで行われたが、このボーリング場はすごいのであった。何せ、開店したときに、王女さまがセレモニーにご臨席になったというのである。タイでは、ラヨンのような田舎町でボーリング場ができただけで、王女さまをご臨席になるというのに驚いたが、どこかで、何かがあれば、王族がテープカット役にみえるのが常らしい。

もうひとつ、すごかったのが、設備が傷んでいて、まんたんが選んだボールの指穴は傷ついて、ギザギザだったのである。たいていのボールがそうだったらしい。

みんなでボーリングをして、上位者には、ぶんぶんが用意した賞品を贈呈した。

## タイ 2-9 作戦その2 バスケットボール大会

さて、次なるぶんぶんの作戦はバスケットボール大会であった。

近くのタイ政府系の会社に体育館があることを知ったぶんぶんは、その会社に以前勤務していたタイスタッフに頼んで、体育館を借りた。そこで、バスケットボール大会を開催したのだ。

まんたんは、買出し用の4つのアイスボックスに氷を入れて、コーラやお水やジュースを冷やして持っていった。チームがわかるように、赤い布を切って鉢巻用に準備した。

かわいそうなぶんぶんは、体育館の入り口に靴をおきっぱなしにして盗まれた。リーガル製のスリッポンであった。とても惜しかった。

なんとか、エクスパッツとタイスタッフの距離を縮めようとぶんぶんは懸命だったのだ。



バスケットボール赤チーム  
エクスパッツはどこ？ぶんぶんの左となり



バスケットボール緑チーム  
どう見てもひとりプロレスラー  
後、青と黄チームがいました

## タイ 2-10 作戦は成功したか

ぷんぷんの懸命の努力は成功したか。

確かに、顔と名前が一致したことは事実だということだったが、よくわからなかった。けれども、思いがけず、努力は実っていたのだった。

日本に帰って何年目かのこと、まんたんとぷんぷんは会社の方の結婚式にお招きを受けた。披露宴の同じテーブルに、出張でラヨンに行った方と一緒に。ラヨンの話で盛り上がったが、その方が成功を教えてくれたのである。

あのパーティバットに日本から来たというと、「ぷんぷんとまんたんは元気かと聞かれるんですよ。ぷんぷんさんは、仕事とチームワークを教えてくれた。神さまのような人だと、と呼んでいました。」



これはバスケットボールの練習風景  
ちゃんとやれます、という証拠

パーティバットは、「ブッダ」と言ったのだろうか。「ゴッド」と言ったのだろうか。そのとき、いろんなことを思い出して、まんたんとぷんぷんの目には、涙が浮かんだ。

しばらく、まんたんは、ぷんぷんのことを「おい、神さま」とか言って、嫌がらせをした。

すべて、あの2列に分かれたパーティの衝撃のなせることであった。

## 第4部 まんたん、女学園に行く

### タイ 2-11 子供たちの瞳

レディースクラブの会報は、催し物や、タイの行事や、新しいレストランやら、ラヨン生活の広汎、かつ唯一の情報源であったから、まんたんは熱心に読んだ。

あるとき、ラヨン女子学園のために協力を求むという記事が載っていた。ラヨン女子学園は、小学校から17歳までの女の子と一緒に暮らし、勉強するところで、さまざまな理由で家庭で暮らせない子供たちの学園ということだった。

オデットとそのグループは、学園運営のために協力し、英語も教えているという。学園を出ていく子供たちの就職のために、英語は非常に有利なのだという。

「英語を教えるクラスを手伝ってほしい。オックスフォードの英語辞典を読める人なら、誰でもできる。子供たちの瞳を一度みてほしい」と、あった。

まんたんは、「子供たちの瞳」という言葉に、タイの子の黒いまあるい目を思い浮かべ、就職に有利だという英語クラスのある理由をもっともなことだと思った。

もっともなことであったが、まんたんは英語がからきしダメである。日本で英語の先生になった同級生は、みんなオックスフォードの英語辞典を分割払いで購入し、物置に縄でしばって置いてあるのを見たことがあるのだけれど、あの辞典を見ても、まんたんにはわからない。

それで、オデットに手紙を書いた。「レディースクラブの会報であなたの活動を知った。協力したいが、私はオックスフォードの英語辞典を読むにはもうひとつ辞書が必要なのである。けれども、あなたの書いた記事のおかげで、学園の子供たちの瞳を見ることができた。ありがとう。」もちろん、あやしい英語である。

気持ちばかり、お金を同封して、オデットの家が届けてもらった。何を考えたことでのことか、もう思い出せないんだけど、そのお金は子供たちのためというより、子供たちのためにオデットたちが連絡のために会ったりするときのために使ってほしいとも書いた。日本ならお茶代ということですんなりいくところだけど、オデットは、何を言ってるのか、わかんなかったと思う。



オデットさん、リリしい

ぶんぶんは、まんたんがものおじしないと、ゲラゲラ笑うのであった。

まんたんは、いいじゃないか、オデットの記事はよかった、と平気であった。

## タイ 2-12 オン・ビーフ・オブ

ところが、騒ぎになっていたらしい。金額が大きかったらしいのだ。

ぷんぷんの同僚の奥さん、ジェリーから電話があった。

「ラヨン女学園にたくさんの寄付をしたのは、まんたんか？名前が日本人ではないかと、クラブの会長のヘレンが確認したがっている。」

というのだ。まんたんは、ここで後悔した。

オデットの記事を読んだこと。

英語ができないので教えに行くことはできないけれど、オデットたちの活動に心を動かされたこと。けっして、「たくさん」ではなかったこと。

女学園のためというよりは、オデットたちの連絡などのために使って欲しいと思っていること。

電話でこんなことを言うのだけで、じゅうぶんにもんどうだったのだ。あ～あ、よけいなことをしちゃったなあと後悔したのである。

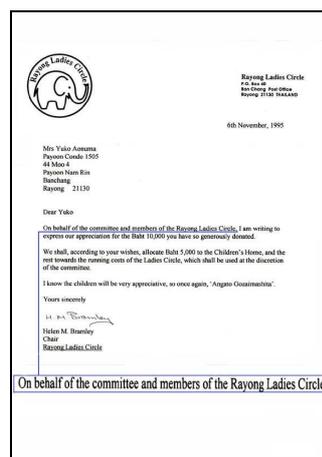
日を置かず、ヘレンから、「感謝状」が届いた。「寄付はラヨンレディークラブに届いた。ラヨン女学園のために使われる。」

そして、「オン・ビーフ・オブ・ラヨンレディークラブ」とあって、ヘレンの署名があった。

まんたんは、オン・ビーフ・オブという、なぜか、反射的に「天にかわりて、不義を討つ」という日本語を思い出すのを常としていたので、その「かわりて」はこんなふうにするのかと、感心した。

ほんとうに、たくさんではなかったのだ。日本で、ちょっとした温泉にぷんぷんへ行けば、軽く消えていくくらいの金額でしかなかったのだ。

ただ、1ドル80円の時期ではあった。



ヘレンさんからの感謝状  
On behalf of で文書が始まります  
像さんはレディークラブのマーク

## タイ 2-13 まんたん、女学園に行く

ある朝、コンドミニアムにベルギー人の奥さんが訪ねてきて、「女学園に寄付をありがとう。これから、英語のクラスがあるから一緒にいかないか。」というのだ。

まんたんは、英語ができないから教えることはできない、のだと繰り返すのにうんざりしたのと、女学園を見てもいいかなあと思ったので、一緒に行くことにした。よく聞けば、女学園は、日本で言えば、養護施設と矯正施設のような学園で、家庭に恵まれない子供もいれば、ヘロインに手を出した子

もいれば、女性最古の職業と言われる望ましくない仕事で生活していた子供もいるという。

う～ん、英語がその職業に使われることがないことを祈りたいと、妙なことを考えたのを覚えている。

女学園は、スクムビット通りに面した、原っぱにあった。驚いた。

まんたんは、寄宿舍付き学校というイメージがあったから、原っぱの中に、ポツンポツンと点在する木造の粗末な小屋が、宿舎であり、食堂であり、教室であったりするのに、驚いたのだ。

教室の黒板は使い古されてデコボコだった。



後ろに見えるのが女学園  
隣はフィリピン人のリサさん

## タイ 2-14 握り締める手

教室で待っていると、子供たちがやって来た。制服はピンクの上着と紺のスカートなんだけれど、足りないので、制服のない子が多い。

ABC とか、10 までの数とか、曜日とかを英語で言うという授業だったので、まんたんは、これは、まんたん向けの英語の授業であると思った。

その日の先生が黒板の前に立って、授業をやっている間、子供たちの間に座って、いっしょにABCをやったり、ノートのスペルをみてあげたりするのだ。

まんたんの両脇に座った子供たちは、まんたんの両手をぎゅーっと握り締めてくるのであった。まだ、子供なのだ。甘えたいのだ。外国人に緊張しているのだ。まんたんなら、髪も目も黒いので、手を握ることができるのだ。

冷んやりと湿った手が小さくて、まんたんは、ほんとにこんな子がヘロインとかやってるのかと、信じられない気がした。

なし崩しに、火曜日の英語のクラスに参加することになってしまったのだ。



教えてる?教わってる?

## タイ 2-15 書類を書く

英語の授業は、最初は、イギリス方式で行われていたのだけれど、実際的に役に立つものをと、アメリカの難民支援グループの英語教育の方式に変わった。

その日は、仕事を探すための書類のようなものが教材だった。名前、性別、生年月日、住所、両親の名前などを、記入するというものだった。

父親の名前を書くというときだった。まんたんの見ていた子が困った顔をして「パパ、ノー」とまんたんに言う。

まんたんは、あっと声をあげそうになった。



教えてる！



終わって少し、ほっと

この子は、お父さんがいないのだ。理解した瞬間、涙が出て、子供の手前、泣いてはいけないと思っても涙が出て、止まらなかった。他のレディースも、理由に気が付いて、泣き出し、涙の大会になってしまった。

まんたんのせいである。せいなんだけれど、どこか、他国に暮らす外国人の張り詰めた気持ちが、ふっと行き場を見つけて姿を現したようでもあった。

帰り道に、泣いてしまっておめんなさいとあやまると、みんな、照れくさくなって、「感動的であった」とか、照れくささをごまかすのであった。

まんたんがタイで泣いたのは、3回切りである。自分が辛くて泣いたことはない。意地を張っていたのだ。3回のうちの1回目がこのときであった。あとの2回は、また別に語りたい。



「チーズ」ではなく「ハイ」

後日談になるが、ラヨン女学園は、外国人の帰国が始まり支援がなくなると、あっさり廃止された。帰国後2年目に訪れたとき、廃屋の板塀が残るだけの、原っぱであった。

タイの人は、自力で女学園を維持しようとはしなかったのである。

## 第5部 コンドミニアムの人々

### タイ 2-16 コンドミニアムの人々

パユーン・ガーデン・クリフ・コンドミニアムというのが、まんたんとぶんぷんの住いの正式名称であった。

ガードマンつき、プールつき、プライベートビーチつき、テニスコートつき、お庭つきのこのコンドミニアムを支えていた人々のことを語りたい。

記念すべき1人目は、マネージャーのクンコンから始めたい。



コンドミニアム正面玄関  
入って左にクンコンがいつも、いつもありました

クンコンはコンドミニアムのスタッフで唯一、英語ができたので、何でもかんでも、クンコンのところに持ち込まれるのであった。細身のまだ若いクンコンは、年中無休でフロントのところに座っていて、水がこない、電気がつかない、掃除を頼む、クリーニングを頼む、何でもかんでも対処するのだから、大変な仕事であった。

対処の仕方にかなり幅というか、融通無碍なところがあったが、致し方ないというべきであったろう。そう何もかもはできないのだ。できないから、しないまでのことであったと思う。

まんたんは、クンコンがどれほどの待遇で、この仕事を引き受けているのだろうかと思った。バンコックあたりで、もっといい仕事があるんじゃないかと思ったのだ。

クンチャイに聞いてみると、意外な答えが返ってきた。

クンコンは、もともとバンコックにいたが、コンドミニアムの持ち主に莫大な借金があって、ここで働かざるを得ないというのだ。

クンコンは恋に生きる人であったのだ。恋人に貢いで借金ができたのだという。その恋人は男の人であったろうという。

クンチャイ情報は、本人に確認されたものではないだろうから、不確かなんだけど、気の毒であった。



前にも出てきたクンコン  
ほんとうはクン・コン  
彼の専用席、カウンターの中です

### タイ 2-17 オーナー

毎週、土曜日になると、オーナーがバンコックからお供の女の人と、白いベンツでやってくるのであ

った。ロビーでは、クンコンが書類を前によく報告させられていたので、中年のそのおばさんがコンドミニアムのオーナーだと知れた。

クンコンに聞くと、やっぱりそうで、最上階に夢のようにビューティフルなお部屋があるのだという。

オーナーがいる間は、コンドミニアムが緊張する感じだった。少し尊大な態度で、従業員にはにこりもしない。顔の感じが、普通のタイ人とはあきらかに違う。クンチャイに聞くと有名な中国系の財閥総帥の妹であるという。

さて、忘れられないのが、この財閥の一族を襲った大事件である。

「なんか、今週、オーナーのおばさん来ないねえ」とぶつぶんと話していたところに、クンチャイから、ご注進があった。「問題だ、大問題だ」と興奮している。



コンドミニアムから  
プールへ続く出口  
こんなに設備よかったの？

クンチャイは、たいていのことは「問題ない」のノー・プロブレンが得意であったから、何かかと思った。

件の財閥総帥が射殺されたというのだ。新聞にも出ているし、テレビでもやっているという。犯人は、意外にも総帥の長男であった。つまり、オーナーの兄が甥によって小銃で撃ち殺されたのであった。

親を射殺するというのは、家族を大切にするタイの人にとって、やはり衝撃であったらしい。理由は何だったのか、タイの新聞をいっぱい買って、クンチャイにまとめてもらった。

ロシアからきた美しい舞姫と総帥長男が恋におちたのが、理由であった。中国系財閥の総帥は、2人の結婚を決して許そうとはしなかったらしい。

そうだろうなあと、まんたんは思った。

そうして、惨劇になった。行方がわからなくなっていた長男は、バナナ畑の中で父親を撃った銃で自殺して発見された。



コンドミニアムの一部  
左に見えるのが、何とテニスコート  
猛暑のテニス

美しい舞姫は、タイの人の憎むところになった。お金のために、善良なタイ人に凶行をそそのかした外国人とされたのだ。警察の捜査も及んだらしいが、早々にロシアに帰ってしまった。まんたんは、その舞姫がどれほど美しかったことであったかと想像した。

しばらくたつと、オーナーはまたコンドミニアムを監督しに訪れるようになった。憔悴しきっているのではないかと思ったが、相変わらず、にこりともせず、ロビーにいたのであった。

## タイ 2-18 ナーママとナー

コンドミニアム、クリーニングサービス担当は、ナーママであった。本名は知らない。小学生の男の子がいて、その子を「ナー、ナー」と呼んでいたので、まんたんは、男の子をナーと呼び、その母をナーママと呼んだ。

呼ぶと2人とも返事をしたから、いいのだとした。

クリーニングは即日できあがるのであるが、アイロンはかかっているけれど、十分に乾燥していなくて、重たく濡れていることがあった。熱帯は水が悪いので、すべての洗濯物にアイロンをかけて消毒するのだと聞いていた。濡れたままなのは、気持ち悪かった。

けれども、ナーママが、洗濯物を届けに来るときにもらうチップで、ナーを学校に通わせているのがわかったので、まんたんはアイロンかけの要るものはナーママに頼むことにしたのだ。

夕方、夕食の支度ができたところに、ナーとナーママがやってくる。部屋には用事がない限り、人を入れないのが、安全生活の基本である。



ナーママとナー  
雰囲気はタイでしょう

まんたんは、基本的に忠実ではなかった。ナーとナーママはやってきては、少し話して、そうして20パーツもらって帰るのであった。

話してといっても、まんたんはタイ語がわからないし、ナーママは数語の英語だけで、日本語はわからないから、混乱していたと思うが、双方、会話をしたつもりで満足した。そう、混乱していることさえわからなかったから満足したのだ。



日本に戻る直前、あいさつに来たナーママとナー  
ナー成長、ナーママ涙でボロボロ

そのうち、ほんとうに何を言ってるか、わかるようになったのだ。不思議だが本当だ。

一度、ナーママが棒でナーを叩いているのを見て、びっくりしてナーを背中にしてかばったことがある。ナーも泣いてるし、ナーママも泣いてる。とにかくナーママをなだめて、様子を見ても黙ったままのクンコンに聞くと、ナーがふざけて、フロントにきたオランダ人の奥さんのハンドバックを持ってロビーを走ったのだという。それを見たナーママは、逆上したらしい。

クンコンは、厳しい顔で「泥棒はいけない」と言った。ああ、ママは仕事を失うところだったんだと、まんたんは気がついた。

ナーママは、まんたんのところに電話してくることを覚えた。フロントの電話から、こう言って寄越すのである。「マダム、ママー。クン・マンタン、ママー」用事はないのである。電話することとまんたんとは仲良しなのが、嬉しかったらしい。

まだ、「ママー」という声が耳に残っている。

## タイ 2-19 レレレのおじさん

レレレのおじさんと名付けたのは、いつも箒を持ってお庭をお掃除していたので、赤塚不二夫さんのまんがの登場人物になぞらえてのことだ。

十分に掃除がなっていたかどうかは疑問の残るところだが、とにかく、箒を持っていることが重要であるらしかった。おじさんは水撒きもやっていた。いつも、ニコニコしていた。

前にも書いたが、砂浜にあるコンドミニアムの庭は極めて人工的なものであって、管理は大変であったのだ。よく、南のホテルの庭に自然の豊かさを感じるというような人がいるが、あれは、ほぼ間違いなのだ。住んでみて初めてわかったことだけだ。



再登場、レレレのおじさん  
ホウキは持っていませんが、いつもニコニコ

さて、庭にはヤシの木がたくさんあった。鑑賞用に植えられているので、実がなくても採集されることはない。



今回、登場はありませんが、  
以前出てきた哲学メカ  
後ろでガードマン遊ぶ

まんたんがひとりで家にいると、ドーン、ドーンと音がした。遠い間隔で、それでも、確かに鈍い地響きのような音がするのだ。ドアをあけても、工事の気配はない。何だろうと、クンコンに聞くと、ヤシの実が落ちるのだという。

驚いた。

まんたんのお家は 15 階であったから、そんなに響くのかと思った。外に出てみると、レレレのおじさんが実を拾っていた。まんたんは、おじさんがおやつにヤシの実のジュースでも飲むのかと考えたけれど、違った。

おじさんには、大変な特技があったのだ。庭の奥の方の、あまり人がいないところに、おじさんの作業場があって、そこで、ランの花の鉢植えを作っていたのだ。ヤシの実を半分にして、くり抜いて土を入れて鉢にして、ランの苗を挿して増やすのだ。

作業場に連れてってもらったまんたんが感心すると、おじさんはニコニコ得意そうだった。気をつけてみると、レレレのおじさんの鉢植えは、庭のあちこちに木に針金で結びつけてあって、コンドミニウムにランの花が絶えることはなかった。



同じく登場はありませんが、  
コンドミニアムの掃除のお姉さん

## タイ 2-20 クン・ウドン

コンドミニアムの誇るガードマン、しかも唯一のガードマン、クン・ウドンは背も高く、体もがっしりしていて、さすがにこういう人がガードマンに採用されるのだなあ、という気がした。

顔つきまで、しっかりしていた。日本のおまわりさんのような帽子と、水色のシャツと、紺色のネクタイ、腰に下げた警棒がガードマンの制服で、ここはガードしているのだと主張されていた。う～む、たった一人というの不安であったが。

クン・ウドンはまんたんとぷんぷんが好きだった。火急の事態が発生しないかぎり、玄関のところにいる。

火急の事態は一度も発生しなかったので、お昼ご飯を食べるとき以外、クン・ウドンはいつも、玄関のところにおいて、まんたんとぷんぷんに会うと敬礼して、その後しっかりした顔をニコッとさせるのだった。

まんたんが、クンチャイとパタヤに買出しに行って帰ると、ストレッチャーに荷物を載せるのを手伝ってくれ、クンチャイから引き継ぐ形で、ストレッチャーとまんたんをお家まで送り届けてくれるのであった。

まんたんは、荷物を運んでもらうのが、申し訳なかった。もちろん、20バーツのチップをあげるのだけれど、本来のクン・ウドンの職務ではないわけで、クンチャイに運んでもらえばいいわけで、クン・ウドンが定位置を離れれば、コンドミニアムのガードシステムが壊滅状態なわけである。

クンチャイにそのことを言うと、驚いたことにクンチャイはクン・ウドンに荷物を運ばせてやってくれと、まんたんに頼むのであった。

「ウドンは4人子供がいて、お酒も好きで、お金がない。ウドンは体が大きいので、いっぱいご飯を食べる。2人前食べる。ガードマンにチップをくれる人はいないので、マダムにチップをもらわないとプロブレンなのだ。」ということだった。

クンチャイは自分が運べば、自分がチップをもらえるのに、それをクン・ウドンに譲っていたのだ。ああ、なんという人の良さだろう。クンチャイはほんとうに、やさしい気持ちの持ち主だったのだ。

タイの人の心の一端に触れたような気がした。

警備上の不安は残ったが、まんたんは、クン・ウドンの好意に甘えることとした。制服のシャツは替えがなかったらしく、酸っぱいような臭いがしていた。

一度、クン・ウドンはクンコンと喧嘩して、コンドミニアムを辞めた。近くのホテルのガードマンに



クン・ウドン  
体格はガードマンぴったり  
タイ人ではめずらしい



1年後のクン・ウドン  
トラパーユで元の職場復帰

なって、今度は、グリーンベレーのような姿で、門のところに立っていた。けれど、すぐに condominium に戻ってきて、日本のおまわりさんのような姿になった。

タイの人の職業感の一端に触れたような気がした。

## 第6部 レディースの流行

### タイ 2-21 のびやかな仕事

買い物に出かけて、不思議でならないことがあった。お店の人が、よく何かを食べているのである。

プラスチックの容器に入ったご飯に何かかけたものとか、ビニールの袋に入った果物とか、お菓子とか、くちやくちや食べているのである。飲み物もそうだ。ビニールの袋に氷を入れて、ゴムでしばってストローを挿して、ちゅうちゅう飲んでいるのである。

初めは驚いたのだけれど、慣れた。

食べているだけではない。長い髪の毛を延々ととかしていたり、お化粧品に余念がなかったり、マニキュアを塗りっこしていたりするのである。

ラヨンだけではない。パタヤもそうだった。何事ものびやかなのである。のびやかなのだけれど、見る度になんか、ため息が出た。この国で緻密な仕事をするのは、なかなか大変だと思った。

珍しく、仕事熱心なお店があると、感動するのだったが、たいていは、チャイニーズのお店だったのだ。

### タイ 2-22 ぷんぷんゴルフに行く

タイ人スタッフのダムロンクに誘われて、ぷんぷんは、ゴルフに出かけた。ゴルフセットは、持ってきていたし、ラヨンではゴルフ場はエクスパッツの多く住むコンドミニアムの敷地内にあり、すぐ近くなのだ。もしかしたら、逆で、ゴルフ場、クラブハウスが併設されてなければ、いい住いではないとされる気配さえあった。

おまけに、タイではゴルフはお金がかからないので、レディースたちの中にもサークルを作って楽しむ人が多かったのである。

ぷんぷんも「タイにいる間に腕を磨く」とか言って、張り切って出かけた。

ところが、帰ってくると、様子がおかしい。日に焼けてはいるがあきらかに顔色が悪く、気持ち悪いと言う。だるくて、手足がひきつる感じがすると、ベッドに入って横になってしまった。

「キャディさんもいたんでしょ」というと、キャディさんは何もしないで、ついて歩くだけなのだそうである。



ゴルフが終わってすぐの写真  
左手に日焼けの証拠  
もうふらふらしてる

「そういえば、茹で卵食ってた」ゴルフ場のスタッフも、勤務中の飲食が盛んらしかった。

熱を計ると 37 度。大したことはないが、どうも変だ。どうしたんだろう、どうしたんだろうと考えて、思いあたった。軽い熱射病にかかったのだ。あわてて、頭と両脇の下に氷を入れたビニール袋で冷やし、強引にパタヤでしか売っていないスポーツドリンクを飲ませた。



前にも出てきたゴルフショット  
もう、熱射病にはなりません、ズボンが短い

バンムングラ病院に連れて行った方がいいのではないか。ラヨンでは、公共の救急車などはない。クンチャイに乗せてってもらおうと、勧めても、寝ていた方がいいという。

心細かった。何かあったら、ひとりで対処しなければならない。よその国で、体調が悪いというのは、ほんとに困ることなんだなと思った。

翌朝、ぷんぷんが、起きてきたときは、ほんとうにうれしかった。

## タイ 2-23 床屋さん

日本を立つ時、タイでは床屋さんがあるかどうかかわからないと考えて、髪切りハサミと髪梳きを買って行った。

けれども、ラヨンでは、床屋さんがあった。初めて、床屋さんを認識したときは、鋏、梳きを買ってきてよかったと思った。車で道を行くと、道端に忽然と理容椅子があるのである。頭の上は、雨には耐えないと思われるヤシの葉がかたちばかりさしかけてある。

「これ、床屋さんだよねえ」とため息をついた。

ぷんぷんは笑うけれども、この具合の床屋さんで髭剃りなんてやってもらったら、怖いと思った。エイズや肝炎は必定と思われた。

しかし、まんたんの床屋さんの腕を信じない、まんたんも信じてはいなかったが、ぷんぷんは、会社でエクパッツに聞いてきて、PMY ホテルの美容室で散髪した。まんたんもついていって、シャンプーしてもらった。

これがよかった。予想外によかった。3 回もシャンプー液をかけてはすすぎ、かけてはすすぎしてくれるのである。

ただ、頭を洗うのは水である。日本のように「お湯加減いかがですか」なんてことはない。けれども、耳の中までいぬいにお水をかけて、拭いてくれる。最初は間違えて水が入ったのかとびっくりしたが、それがあつべきサービスなのであつた。

できあがつたぷんぷんのおつむはどうなつたかということ、見事にタイ化してつた。説明はむずかしい

のだけれど、頭頂から耳の上あたりまであまり切らず、耳から下はかなり切りこんで短くし、結果ほんのりと茸型になる。後頭部がアヒルのおしりのように、右からきた髪の毛の流れと左からきた髪の毛の流れが会うところが、微妙にでっばっている。

昔、そんな髪型が日本でもあったような気がするけれど、タイの人と同じ感じになるのである。まんたんは、なんか、かわいくて、しばらくぷんぷんを見ては笑った。



わかりづらいですが、頭がタイカット

## タイ 2-24 レディースの流行

最初は誰でも参加するパーティー、コーヒーモーニング、次に誘い合っただけの自宅ランチ、ディナー、それがめんどうになるとレストランを捜してのランチ、それと重なるけれどビューティーパーラーに行くこと、仕立屋さんを捜し、情報を交換しての洋服づくりなど、レディースのスケジュールにも、流行というか変遷があった。

まんたんは、買い物をしてご飯を作り、クンチャイと象さんに会いに行ったり、市場に行ったりでもしろうく、1人でもどうということもなかったが、他のレディースにとっては、何かをしていないと、楽しんでいなくてはいけないという空気があった。

それは、ある種の脅迫観念のようなもので、「まんたん、楽しんでる？」とか、「幸せ？」とか挨拶代わりに言われると、この人たちは、幸福でいなければならないという「幸福病」にかかっているのではないかと考えたりもした。

人間はたえず幸せでいるべきであるという、人生観のようなものかもしれない。

こんな風にかげば、なんという怠惰な生活かと思われるかもしれないけれど、わかるところもあるのだ。慣れない不便な南の国の倦怠の中で、我を失ってとろけてしまわない知恵のような意味もあった。世界中あちこちで生活している人たちだったから、そんなことは経験済みで、基本的には自分たちのスタイルを堅持しているのだけれど、それでも、本来の生活ではない疲れがじんわりと溜まるのである。



まんたん、象さんと遊ぶ  
象さん、まんたんと遊ぶ

どうしてもなじめずに、帰国する人もまれだけいたのだ。

ただ、朝の8時に「まんたん、今日のスケジュールは？」と電話がくるようになると、げんなりすることもあった。家にいたいという日もある。英語が疲れるということもあった。

## タイ 2-25 ビューティーパーラー

ぷんぷんの床屋さんの話をしたので、まんたんのビューティーパーラー行きのお話をする。

ビューティーパーラーは、パタヤにはホテルのも、そうでなくても、清潔で、素敵なのがいっぱいあるが、いちばんすごかったのが、シラチャの近くのビューティーパーラーだった。

だいたい、日本の美容院と違って、ビューティーパーラーは髪も手入れすれば、マニキュアもやり、マッサージもお化粧もしてくれるのである。

シラチャのは、1日ばかりであった。

到着すると、お茶である。順番に顔のマッサージをし、石膏みたいなパックをし、その型を記念にもらい、全身マッサージに入る、これは普通のタイマッサージと違って、香りのいい油を使うので、その後はシャワー。このあたりで、お昼ご飯が供される。午後に、髪をシャンプーし、切り、パーマをかける。

髪をいじってもらっている間に、爪の手入れで、甘皮むき、磨き、マニキュア、ペディキュアになり、お化粧で終わるが、またお茶になる。

いい加減、飽きて、「夫が帰るから、ラヨンに戻らなくちゃ」と言うと、日本人の夫は横暴であるかのような印象を与えたらしく、「問題はない。ポブに言って、ぷんぷんに帰りが遅くなると言わせる」と厳かに言い、おせっかいにも、本当にポブという人に電話している。

しかるのち、今度はぷんぷんから、「ボブって誰だかわかんないけど、お茶を飲んでるって電話があった。何だったんだあ」電話がある。

まんたんは、頭を抱えなくなった。抱えなくなった頭は、パーマが強すぎて、モヘア毛糸のようになっていた。

## 第7部 正倉院御物

### タイ 2-26 日本の人形

レディースクラブのランチョンのときに、ドリーンが「私はイクバーナを知っている」とまんたんに話しかけてくれたとき、イクバーナとは何かわからず、「んっ」とドリーンを見つめてしまった。何ゆえの突然のイクバ~ナなのか、何かまんたんに関係のあることなのか、ほんとうにわからなかったのだ。

イクバ~ナとは、生け花のことであった。

ドリーンは、横浜に住んでいたときに、日本文化を学ぶべく、生け花教室に通っていたのだった。マツヤで展覧会があって、ドリーンのイクバーナは大変好評であったという。

日本に住んでいたことのある人は、やはり、日本人に親切である。「家に日本の人形があるから見て」と言われて、まんたんは、ガラスケースに入った博多人形を思い浮かべながら、何人かのレディースとドリーンの家に行った。そして、仰天したのだった。



ピンクのドレスがドリーンさん  
まんたんは手製のキモノ？着物

居間の壁が一面丸ごと、木の階段になっていて、そこには、50本ほどのこけしが並んでいた。見事だった。なぜか、五つ玉のそろばんや大工さんの使う墨壺も並んでいた。

まんたんは、素直に「素晴らしいコレクションだ」と絶賛した。まんたんの父親もこけしを集めていたことがあったので、少し、こけしのことを聞き知っていたのだ。日本のものが好きで、大切にしてくれているのはうれしいと思ったし、ドリーンも自分の日本人形をほめてもらうのはうれしかったらしい。

こけしという種類の日本の人形で、「これは鳴子、これは土湯」と形や彩色や顔で産地がわかること、底を見るとどこの誰が作ったのかわかること、古いものは値打ちがあることを、したり顔で言うと、ドリーンの目がキラリと光った。「どこの誰が作ったのか、日本語と英語で書いて」と言うのだった。

ありゃ~、よけいなことを言ってしまったと後悔したが、遅かった。仕方なく、全部書いた。「木地山 小椋久太郎 KIJYAMA Ogura Kyutaro」という具合である。読めないものは、みんな推測で書いた。

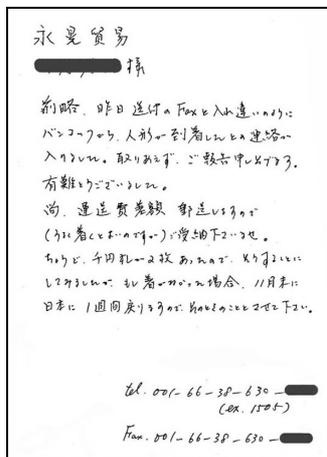
おもしろいのは、「1番値打ちがあるのは、尺ものの木地山だ」と言うと、ドリーンが「私は好きではない。こっちの新しいのがきれいだ」いわゆる創作こけしを指して譲らなかったことである。

こけしの産地を書くのは大変だったが、もっと大変なことになった。

他のレディースが、遠慮がちに創作こけしのようなのが欲しいと言い出したことである。郵便事情がタイは不安であるからと逃げようとしたが、「日本の物価が高いのは知っている。バンコックのアメリカ

力大使館の友だちのボックスに送ってもらえば、間違いはない」と遠慮がちな割には、詰めはしっかりしている。

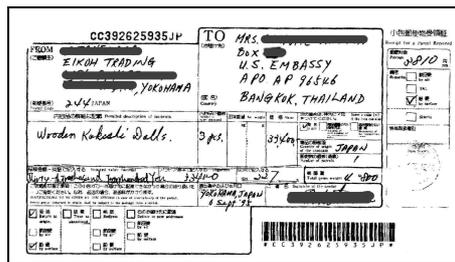
仕方ないので、日本に頼みこんで送ってもらった。まことにやっかいだった。



こけしが届いたという  
まんたんからのFAX

ドリーンは横浜のフリーマーケットや、相模原の骨董品店でごく安い値段で集めたという。骨董店というよりは、外国人向けの新品でないものを扱うお土産屋さんだと思う。

ドリーンはカナダに帰って、新しい家に日本の人形を飾るのを楽しみにしていた。今、ギリシャにいる。まんたんは、ギリシャでもあの階段にこけしが並び、ドリーンがギリシャのレディースに見せて、イクバーナについて語っているかと思うと、なんとなく楽しくなってくるのである。



US EMBASSY宛の送り状のコピー  
Wooden Kokeshi Dolls も左中央にあります  
悪戦苦闘の結果の証拠！

## タイ 2-27 阿古耶の松

マーガレットのこけしの件から、機会があると、まんたんは、日本のものを次々に拝見することになった。前にも述べたことがあるのだけれど、日本にいたことがある人、行ったことがある人が結構いたのだ。

理由は観光の他に、2つあるようだった。

1つは、これは、ぷんぷんがタイに行くことになった理由でもあるのだけれど、ぷんぷんの会社の工場の部門には、外国の会社の資本が入っていたことである。その会社の人々が日本に駐在することがあったのだ。現在、外国資本はなくなったのだけれど。

もう1つは、タイの工場のプラント建設は日本の会社が担当したので、企画、設計の段階で、どうしても日本に駐在する人がいたらしいのだ。

タイで、日本のものと対面するというのも、考えてみればおかしなものだけれど、ドリーンに負けじとばかり、披露してくれるのであった。あれは、やっぱり、一種の自己主張だと思う。となると、まんたんは、拝見したものに、深く興味を示し、感想を述べ、褒め、そのものについて、こけしと同じくらい物語らなければならぬのであった。

買っているんだから、何がしかの知識は得ていると思うのだけれど、他の人たちの前でまんたんに語らせたいのである。

ジュリーンは一戸建ての家に住んでいたが、玄関を入ると、右手に「日本の絵」が飾ってあった。畳半畳ほどの大きさの黒い板に松の木が1本、烏帽子をかぶった狩衣姿の男の人が座って笛を吹いていて、十二単の女の人立っているのである。それだけなのだ。

良く見ると、物入れの蓋の部分のようであった。まんたんは、お雛さまの箱を思い出した。押入れ下段半分にちょうど入る、手前の面が蓋になっているものである。ジュリーンに聞くと、はたして、「箱だったが、絵のあるところだけを残して捨てた」というのである。黒い地塗りは漆ではない。絵も、松と男女がそれぞれ勝手に、闇の中で空中浮遊している按配のえらく手抜きのものである。



ジュリーンさん  
笑ってるけどこわそう  
でもいい人です

木の箱だけでは売れないので、あわてて黒く塗って、王朝風の絵を描いたのではないかと思われた。ひどいなあと思ったが、絵のないところは捨てたというのもすごいので、どっちもどっちかもしれない。

まんたんは、専門ではないからわからないがと、あたかも専門が在るかのようなことを言った上で、「これは、ヘーアンという古い時代の貴族のコスチュームである」と重々しく、宣言した。う～ん、これだけでは足りない。レディースの目は先を促して、特にジュリーンの目は期待に輝いている。男の人の衣装は狩衣といい、女の人の衣装は十二単という。

まだ、だめだ。苦し紛れに、三題話をした。歌枕に名高い阿古耶姫の松の話をしたのだ。

日本には、哀しい恋の物語があって、藤原という貴族が阿古耶姫という美しい娘を田舎の領地に連れて行ったところ、毎夜、名取太郎という青年が訪ねてきて、フルートを吹くようになった。2人は恋に落ちたが、太郎はある晩、「私は実は、人間ではありません。名取というところの松の木です。名取に橋を架けるために、切られることになりました。もう、あなたに会うことができません」と去っていった、というものである。

と言いながら、あれ、フルートを吹いたっけかと、自信がなくなったし、阿古耶姫が長袴で夜ずりずり屋外を徘徊していたというのは信じられないというべきである。

忸怩たるものがあったが、その絵が阿古耶の松の伝説を描いたものであるとは言ってないというのが、まんたんのなげなしの良心であった。

## タイ 2-28 正倉院御物

にわかには、日本土産鑑定人みたいになったまんたんは、許されることではない、死んだら地獄に落ちる、と思ったが、どうせ、まんたんの英語はわかんないだろうし、レディースも目的は自分の持っている日本土産について、日本人が興味を示し、ドリーンの日本人形のとくと同じに、何かモグモグ言うことにあるとして、開き直って、モグモグ言うことにした。

クリスティーンの家の数ある居間の中で大きい方の居間は、ソファの後ろが恐ろしく高い天井までの真っ白な壁であった。

その壁に壁掛けがあった。クリスティーンに手を引かれて壁掛けの近くまで行って、まんたんは、あっと驚いた。クリスティーンはまんたんが驚いたのに、満足そうだった。

壁掛けは、日本の帯だったのだ。

天井から壁の左右にワイヤーのようなものを垂らし、2本のワイヤーで棒を吊るし、その棒に帯をゆる〜く巻きつけていくと、丸帯ではないので、裏地の黒が表の隙間からわずかにのぞいて、白い壁に映える豪華な壁掛けになるのだ。

先入観にとらわれない発想である。それとも、どこかで見たのだろうか。近くでよく見ると、裏地にはシミも見えたが、鏡と唐草の正倉院御物風の立派な柄であった。

これは、間違いなく素晴らしい日本のシルクである。キモノを着るときのベルトで、帯という。この柄を見て、8世紀の日本のエンペラーの宝物の柄である。



左端がクリスティーンさん  
その居間、壁掛けが見えず残念  
白い服は偶然でしょう

と概論を述べた後、中国の絹を運ぶ道があって、それは、遠くペルシャやギリシャと中国を結び、日本までつながっていたのだ。運ばれたものは、エンペラーの宝とされ、今も日本に残っている。西は東と出あったのだと、結論を出すころには、NHK でやっていた「シルクロード」のテーマソングが頭の中で鳴り始めていた。

どこまで、理解を得られたかわからないが、キモノと帯のことだけは、レディースの頭に残ったらしい。それで、その後、大変なパーティーが開かれることになるうとは、夢にも思わなかったまんたんであった。これは、またのお話にする。

## タイ 2-29 花嫁衣裳

これは知らない人の家でのことである。ご主人は、ぷんぷんの会社の人ではなかったと思う。

マデリーンに連れられて、キモノを見に行くことになった。お父さんがアメリカのどこかの市長さんだというその人の名前が思い出せない。

静々と運ばれてきた赤いキモノは、なんと鶴の柄の打掛であった。もちろん、新しいものではない。用に耐えられなくなった貸衣装の払い下げといった古風なもので、裾は黒ずんでいて、花嫁衣裳なだけに、かわいそうな感じがしないこともなかったが、日本で一万円ほどで買ったと聞いたときには「あなたはラッキーだ」と本気で言った。

これは、日本のウェディングドレスなのだ。日本の伝統的な花嫁衣裳は、白いキモノを着て、白いベルトを締め、その上にこのキモノを着るのである。長い裾はとても優雅なもので、鶴は、日本では1000年生きるとされていて、花嫁の永遠の幸せを願う柄なのだ。

ラッキーな持ち主は、打掛を着て回って見せた。豪快な裾さばきであった。

まんたんは、こういう打掛をお嫁さんが着るようになったのは、いつごろのことからであったろうと、ぼんやり考えていた。知らなかったのである。

## タイ 2-30 青海波

まんたんが、花嫁衣裳のキモノを見たとき聞き知ったジュリーンは、「私もキモノを持っている」とさっそく、ご披露会ということになった。濃い紫の江戸小紋というのだろうか、鯨小紋というのだろうか、細かい点々の青海波の柄であった。

この細かい柄は、青い海の波とあって、たくさんの波が描いてある柄で、ラッキーな柄だと言うと、ジュリーンは驚いた。白い点々は見えず、紫一色の寂しいキモノだと思っていたという。

「それで、刺繍をしたの」

まんたんは、ぎょっとした。これは、古いものだけれど、今すぐにでも着られるものだったからだ。何をしたのかとみると、前に、茶色の大きな木の葉が刺してあった。あろうことか、極太毛糸で裏地まで、ブスブス刺してあったのである。



これが青海波  
よく見ると目が回る

刺繍は取った方がいいと言ってあげるべきかと思ったが、もう、めんどろになって、何でも刺繍してにぎやかにしてくださいという気持ちだった。

## 第8部 ピシッ、ダーン、ズリズリ

### タイ 2-31 ピシッ

マプタプットの工場地帯に通じる大通りを、まんたんがどこかに出かけた帰り道の午後、クンチャイと車で走っていたときだった。ピシッと音がして、目の前に白い点が見えたかと思うと、みるみるうちに視界全体が白濁した。

何がおこったかわからなかった。ただ、体中がドキドキした。

クンチャイが車を止めた。フロントガラスが割れて、クモの巣状になっていた。見ているうちにもクモの巣が広がって、やがてガラスが剥がれ落ちてきた。

「クンチャイ！」

「オーオォ！」

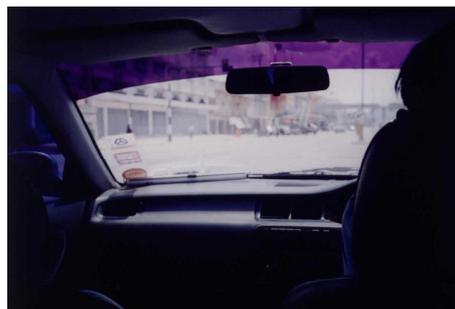
2人で呆然としていたが、呆然としていても仕方ない。ガラスを全部落としてコンドミニウムまで帰ることにした。オープンカー以上である。

クンチャイはそろそろと歩くように慎重に運転してくれた。

「クンチャイ、びっくりしたねえ。」

「マダム、プロブレんだ」

「大丈夫、ぶんぶん電話して RMG (クンチャイの所属するレンタカー会社) で直してもらおうから」



タイでの愛車の窓ガラス。  
窓がない車はフォーミュラカーの気分？

事故にならなくてよかった、すれ違ったトラックが石を跳ね、ピシッと当たったのだ、と同じことを繰り返し、興奮して語り合った。

ぶんぶん電話すると、「2人とも怪我がなくてよかった。ジム・ホートンから RMG に連絡させる。クンチャイに車を持っていってもらえ。代車とかも心配するな」ということで、ぶんぶんの声を聞いてはじめて心地がよかった。

まんたんはクンチャイの帰りの足を心配して、クンコンに頼んでメカニックの力自慢のお兄さんに、RMG までバイクで一緒に行くように頼んだ。興奮していたのでチップを大奮発した。そうして、直るのは例の限りなく永遠の先の「トゥモロ」なんだろなあ、とため息をついた。

ロビーでコンドミニウムの人たちに話を聞かせながら、クンチャイと力自慢のメカニックの帰りを待った。

驚くなかれ、クンチャイは、新しいフロントガラスに交換した、きちんと清掃したうちの車で帰ってきたのだ。すごい、タイはすごいんだ。こんなに素早く対応できるなんて。RMG もすごい。感動した。

しかし、素早い理由はぶんぶんが帰宅してわかった。ジム・ホートンによるとフロントガラスが割れるのは、よくあることだという。まんたんは石が当たったとばかり思ったが、そうとは限らず、陽射しと温度で頻繁に割れるらしいのだ。

だから、準備態勢は充分でフロントガラスもいっぱいあるのだそうだ。クンチャイが冷静に運転してくれたからよかったけれど、それが原因で事故になることも多いという。

気がつかなかったけれど、まんたんの手には小さなガラス傷がたくさんできていて、血がにじんでいた。糸くずのような赤い血を見て、クンチャイとふたり無事であったのに感謝した。

クンチャイは責任を問われるのではないかと思っただけだ。ポストとマダムが、「ありがとう、クンチャイ。クンチャイはいいドライバーだ」と言うので驚いたらしい。こういうとき、運転手さんが責任を問われるのかと、運転手さんたちが気の毒になった。

## タイ 2-32 ダーン

不必要に大きな寝室には、不必要に大きな四畳半くらいの舟のようなベッドがあり、不必要に大きなお化粧台があった。このお化粧台の灯りとして天井に蛍光灯がむき出しになっていた。むき出しになっているものなのかと思っていたら、ある日、メカニックがやってきてガラスをはめていってくれた。そのとき、蛍光灯のある空間に比較してガラスが小さいような気がしたのだけれど、よくまあ自主的にガラスを入れてくれたと感心して、そんなことは忘れてしまった。

ぶんぶんが家に居るときだったから、その週末だったと思う。出かけて帰ってきて、化粧台でコンタクトレンズをはずしたまんたんが、きっかり3歩、居間に歩きだしたとき、背中からダーンと音がした。振り返ると、白くけぶっていた。

このときも、何が起こったのか、一瞬わからなかった。えっ、という感じで見るとガラスが散乱している。化粧台の上のガラスが落ちたのだと認識した途端、体がガクガクとしてきた。3歩のところまで難を免れたのである。化粧台に座っていたら、頭にあの大きなガラスが落ちてきたのである。体中、ガラスが刺さっていたかもしれない。目にガラスが入ったりしたら失明だ。

ぶんぶんは、このときは、クンコンに抗議した。



化粧台へ3歩の距離。  
今、思えばその予感の写真。

お掃除担当のお姉さんも、ナーママも、メカニックも、コンドミニウム中のスタッフが詰め掛けて、お掃除をしてくれた。ベッドカバーはもちろん、ベッドの下に垂れているフリルみたいなのも取り替えてくれた。

ショックだった。ぶんぶんは、まんたんが「ガラスが小さい気がしたのよ」と言ったら、なぜそのとき注意しなかったのかと言う。蛍光灯がむき出しになっているべきものだったのではなくて、ガラスが入るべきだったとすれば、今回、落ちたということを見ると、前の居住者のときにも落ちたと思われること。今後もガラスは落ち続けること。

もっともであった。まんたんの不注意であったのだ。こういう場合の保障なんか、まず期待してはならないのだ。たとえ、失明しても。

それから、なんかあって、工事になるときは、ひっついて見守った。助手になることもあった。ときには、メカニックより有能な助手のまんたんであった。

## タイ 2-33 ズリズリ

ラヨンマーケットで買い物をした後だった。大汗をかいてシャワーを浴びて、マーケットで入手した袖なしワンピースを着て、バスルームから出たまんたんは、寝室のバルコニーの隅に顔を発見した。

お隣のオーストラリア人、ケリーの部屋との境から、誰かが身を乗り出していて顔だけ見えたのだ。見たことのない顔で、きつい感じの若い男の人だったが、コンドミニアムの知らないスタッフが仕事をしているのかと思って、手を振った。バルコニーに出て、「サワディーカ」と挨拶した。顔はニコリともしないで、ズリズリお隣のバルコニーに去っていった。

まんたんは、まあ、なんと愛想の悪いタイ人だろう。少なくともラヨンのタイ人の風上にはおけないなんぞと、気分を害した。

ぶんぶんが会社から帰ってその話をすると、青ざめたぶんぶんは、電話してクンコンを呼んだ。不審に思うまんたんに、ぶんぶんは言うのだった。「落ち着いて、よく考えるんだ、まんたん。ここは15階。今日は何の工事もない。人がバルコニーと伝ってうちに来たんだ。まんたんに、挨拶に寄ったんじゃないんだ。ケリーも危なかったんだ」

そして、クンコンとケリーの部屋を訪ねた。ケリーは留守だった。顔はコンドミニアムのスタッフではなかった。ケリーの部屋に工事があったのでもなかった。

ズリズリ顔はあやしの者であったのだ。まんたんの油断だったのである。仮に泥棒を働こうとしていたとする。侵入しようとした矢先、当該住居の住人から、手を振られニコニコ笑って挨拶されたら、当惑したのではないだろうか。いや、当惑する前に、住人を襲ったかもしれない。襲われたのは、まんたんであったのである。



ガラス戸の向こうに見えるバルコニー。  
ここは15階です。  
スパイダーマンしかいません。外を歩けるのは、



隣の部屋との境はこんな感じ。  
面しているのは海。  
外からはわからない。

## 第9部 ワンス・アポン・ア・タイム

### タイ 2-34 停電のプリマスホテル

ラヨンの街には「食べる」ところはたくさんあった。

ちょっとした集落には、必ず食べもの屋さんがあり、屋台や、半分露店のお店もいっぱいある。お店で食べてる人もいるし、おかげもスープもご飯もビニールの袋に入れて、きりきりゴム輪でしばって、お持ち帰りする人もいた。熱いものや汁ものをビニールに入れて大丈夫なのかと思ったけれど、これがなぜか大丈夫なのであった。

何を食べてるのだろうと、その様子を眺めるのは、楽しくて飽きなかった。けれども、「入れる」お店は多くなかった。始めは、怖かったのだ。道端にあるプラスチックの洗い桶で、洗剤で泡だった水につけて引き上げ、ざるに積んで、食器洗いOKとか、皮膚病のために毛が抜けた犬が食べ残しを店先で漁っているのを見ると、食欲がなくなるというより気持ち悪かったのだ。



屋台はこんな感じ  
この時はもう、平気平気  
前にあるのはバナナフライ  
そう、バナナの天ぷら

で、どうしても出かけるところは限られた。なんといっても、最初の宿泊先 PMY ホテルは数え切れないほど行った。



プリマスホテルの中  
といってホテルのどこかわかりません  
奥に見えるのがコンドミニアム、そう隣です

コンドミニアムが停電になる。停電は「ラヨン電力」から「停電のお知らせ」なんてくることはなく、突然に頻繁にやってくる。ぎゃ〜っ、ということになる。コンドミニアムではガスは無くても電熱器だから、料理ができなくなる。フライパンをかけていても、そのまま料理中は中止になるのであった。

クンチャイを帰した後だと、遠出はできないのである。一番近くのプリマスホテルに出かけるのだった。ここは、ホテルなので清潔だし、停電になっても自家発電があって、ご近隣でここだけ電気がつく。謎であった。

大理石の（ような）階段を昇ると、ピアノのある一面大理石の（ような）壁のロビーがあって、プールの脇を歩いてレストランに入る。なぜかレストランにもピアノがあった。テーブルの上には、いつも蘭の花が一輪生けてあった。なにせここは、ラヨンの中では五つ星のホテルなのだ。

クラブハウスサンドウィッチがとてもおいしかった。間違いなくキャンベルの缶入りだが、スープもあった。タイ料理もあってエビピラフのカウパットクンも、トムヤンクンも、カレーもあった。



プリマスホテルのプール  
立派なホテルとわかるでしょう  
コンドミニアムから歩いて海端から入れます

停電から逃れた外国人が、うんざりしながら、変わった取り合わせの夕食をとるのである。と、瞬間停電になってパチッ、と音がする。停電が終わるとプリマスホテルでは、この瞬間停電があったのであった。

そのときの嬉しさ。これで、真っ暗な夜を過ごさなくてすむ！クーラーがつくから眠れる！冷蔵庫の食べ物はまだ大丈夫だ！

あちこちのテーブルから「カムバック！」と声があがり、周りのテーブルの人と顔を見合わせて、みんなで拍手をするのであった。停電が終わったとき、「カムバック」と言うのだと知った。

なるほど、電気が戻ってくるのだなあと、実感されるのであった。

## タイ 2-35 ワンス・アポン・ア・タイム

レディースクラブ編「ラヨンでの生活」にも掲載されている、ワンス・アポン・ア・タイムは本格的タイ料理のレストランだった。「ラヨンでの生活」にも書いてある有名レストランである。

スクムビット通りを行き、ラヨンマーケットを過ぎて、ピンクの歩道橋（ラヨン名物、ただひとつの誰も渡らない歩道橋）のところを右にまがり、小路を入った先に、この素敵なレストランがあった。



有名な「王様と私」  
ユリプリンナーの格好で  
迎えられました



ワンス・アポン・ア・タイムの1  
テーブルから入口を見た写真  
透かし彫りが見えます  
道路には木彫りのお人形さんが並んでいます

はじめて行ったとき、もっと大きなレストランだと思っていたので、ぶんぶんとして2人で、ここでいいのか心配になって、躊躇した。

タイ柄みたいな一枚布を腰に巻いて、足の間の布端をくると前に引き上げて、ウエストのところに挟み込んで、モンペ様にしている子供のようなお姉さんが、「サワディーカ」と言って入り口をあけてくれたので、仕方なく入ったというのが正直なところであった。

立地と外見は心細かったけれど、素晴らしいお店だった。店内は、タイの民芸品、骨董品でいっぱい、これこそタイの中のタイだと感動した。

壁には厚い一枚板に透かし彫りに彫った森と象の壁掛けがあり、伝統楽器の太鼓や笛や琴を鳴らす楽隊の人形が柱に並び、手の込んだ古い絹織りがあり、古いランプや、古銭が置いてあり、タイの音楽が流れていた。椅子やテーブルも、よくあるプラスチックではなくて、すべて木製だった。少し暗いのがまた、タイの雰囲気よかったです。



ワンス・アポン・ア・タイムの2  
いろんなものが飾ってます

ありがたいことに、英語が通じたのだ。背の高い細面の美しいマダムは英語がわかったし、メニューにも英語版があった。

食器も白地に、紺の網目のような模様のついたタイの焼き物で、テーブルの巻きすのような竹ひごをつないだマットの上に、お料理が並ぶのである。書いていても懐かしくなる。

ただし、料理は容赦なく辛かった。例によって、トムヤンカウパット(ピラフ)、カレー、ポーピアトート(春巻)といくのだけれど、ここでまんたんとぷんぷんは、新しいタイ料理を覚えた。エビとイカのヤム、サラダである。

エビサラダは、ピンポン玉ほどの紫玉ねぎの薄切りと、ミントと、青い唐辛子が半生に茹でたエビを酢とナンプラーで和えてあった。

イカサラダも同じだと思ったら、ミントではなくセロリなのであった。どちらもむせるほど辛くて、口がやけるのだけれど、やみつきになった。



ワンス・アポン・ア・タイムの3  
飾り物いっぱい  
サングラスの男は飾り物ではありません



たくさん、食べましょう  
フォークとスプーンの組み合わせが  
タイの食事です



これがイカのサラダ、かなり辛いです  
そう、Hot, Hot, Hot!

ここで覚えたので、他でもこのふたつのサラダを食べるようになった。キンキンに冷えているのではなくて、生ぬるいのだけれど、爽やかな味！

お店の奥で、民芸品や生地やヒスイも買えるのであった。お気に入りレディースたちをよく、ここに誘った。よく考えると、外国人向けだったから、ことさらにタイ風だったのかもしれないけれど、人気があった。

残念なことに、今は廃業してしまった。

## タイ 2-36 オールド・ジャーマニー

ぷんぷんの会社は、食堂があってタイランチとウエスタンランチがお安く食べられるのだったが、ときどき会社を出て、外で食べることもあった。

オールド・ジャーマニーは、ぷんが会社の人から連れられて行って覚えてきたスクムビットロードのドイツ料理のお店だった。いつもタイ人の女の人が大勢で、店の外で山のようなじゃが芋を皮むき器で剥いてはバケツに入れているのだった。あれだけのじゃが芋が使われるのだから、繁盛してるに違いないと大いに期待された。

小柄な赤いほっぺのドイツ人のおじいさんがやっているお店で、味が全然タイの気配がなくて、タイ風がいやになる時、ありがたいお店だった。

ドイツ料理ということになっているけれど、大きなお皿にマッシュポテトがどっさり、酸っぱいキャベツと、ソーセージが1本載っているのと、玉ねぎとベーコンとじゃが芋のスープに黒パンが一切れ付くセットが主流だった。どうってことがないみたいだけど、おいしかった。まんたんひとりでも、お昼を食べにいくようになった。

ただ、ここは、ひとつだけ問題があった。トイレがいつも、詰まっているのである。洋式水洗ということになっているのだが、流れなければたまる。積もる。大好きなお店なんだけど、あれだけは、まいった。

トイレは大事な問題だった。いつでも、どこでもというわけにはいかなかった。まんたんはくせがついて、ずいぶん長い間我慢できるようになった。容量が大きくなったのだと思う。



オールド・ジャーマニー入口風景  
なんで気をつけをしているの？  
この落ち着きはきっと食事後です

## タイ 2-37 ラ・カイク

マプタプットの街は、出来つつあった工場地帯の近くだったので、急速ににぎやかになった。なんかのパーティーのときに、フランス料理のお店ができると聞いたので、どんなのかなぁと思って、開店前の工事中のときから見に行き、楽しみにしていた。

クンチャイ情報で、開店と聞いてすぐに出かけると、ここは、ほんとうにフランス人のフランス人によるレストランだった。ラヨンの最高級レストランだったかもしれない。お値段もここが一番高かった。

エビをすり潰したスープがことにおいしくて、グレープフルーツとレタスと鱈の薄切りのサラダ、鶏のソテーなんかを良く食べた。パゲットも自家製で、パリパリとおいしかった。

ぶんぶんは、2人のフランス人の男の人が、タイの若いきれいな男の子をそろえているのに、若干、いぶかしさを感じたらしいが目をつぶることにした。

あるとき、レディースとここに出かけたとき、まんたんは、前述のサラダが「ゲイシャサラダ」という名前なのがなんだが楽しくて、どうしてなのか尋ねた。サービスの男の子は「わからない」と言う。お魚だから日本、日本だからゲイシャにしたのかと、推測して笑っていたのだが、ことはそれではすまなかった。

レディースの1人はオーナーを呼んでくれと言った。そして、「この日本のマダムが、なぜ、ゲイシャサラダなのか聞いている」とオーナーに言うのだった。



ラ・カイク、Le Kaiku です  
少し、洒落た雰囲気  
熱帯のフレンチレストラン

オーナーはゴニョゴニョ言って困っている。もういいと言いたかったが、今度は、レディースたちは臍を決してフランス語で話している。オーナーはしばらくして解放されたが、まんたんには、状況がよくわからなかった。

まんたんは、別にサラダがゲイシャでもなんでもかまわなかったんだけど、外国人にはゲイシャははっきりとプロスティチュートで、日本人のまんたんが命名の理由を聞いたのは、それを気にしたのだと思われたらしいのだ。さらに、日本人のマダムに対して無礼であると発展して、いわばまんたんにお味方してくれたらしいのだ。

外国人は、本音は別として、人種や国籍に関わる差別に敏感なのだと感じた。やはり、日常的に主張され、主張する生活のしからしめるところであろう。

でもね、ほんとに、どうでもよかったんだ。ただ、聞いてみたかっただけなんだ。

次にラ・カイクに行ったとき、メニューからゲイシャサラダがなくなってただのサラダになっていて、まんたんは寂しかった。



ラ・カイクの料理人  
映画俳優で似ている人がいます  
若いタイ人は接客係

## 第10部 クンチャイ再建計画

### タイ 2-38 ついに生まれた

忘れもしない8月11日の朝、コンドミニウムにやってきたクンチャイは満面の笑みを浮かべて、赤ちゃんが生まれたと報告した。前日の晩、急に入院して、大産。すぐに女の子が生まれたという。

まんたんとぷんぷんは、他の運転手さんたちと一緒に大いに祝福したのですが、はっと気づきました。これは、大変。病院の費用はあるのだろうか。まんたんは部屋に戻って、ありったけの現金をつかみ、クンチャイに渡し、ぷんぷんを会社に送ったら、病院に行くように言いました。

今日は、クンチャイは病院についてるだろうから外出はなしだな、と思っていたら、クンチャイはすぐに戻ってきて、病院に行ったら、もう退院していて、サムローに乗って家に帰っていたという。日本なら、1週間やそこらは入院するから、まんたんは驚いた。入院費のことがあるので、無理をして退院したのではないかと心配したけれども、市場の近くのラヨン・ホスピタルは高くないし、母子ともに元気だというのだ。

奇しくも、クンチャイと誕生日が同じで、「よかったね」と言うと、クンチャイは「あと2日遅かったら、王妃さまと同じ誕生日だった」と残念がるのであった。

う～ん、王家は偉大なのであった。



ついに生まれた  
白い肌は誰の遺伝？  
マネーマネーはどうにでもなります

### タイ 2-39 まんたんの夢

その晩、まんたんは夢を見ました。クンチャイと車に乗っているのだけど、クンチャイの元気がない。どうしたのか、具合が悪いのかと聞くと「ノーマネー、ノーイーティング」と哀しそうな顔で答えるクンチャイ。

ああ、やっぱり、と夢の中で納得したのは、まんたんがクンチャイの経済状態に不安を抱いていたせいだ。

クンチャイは椰子林つきの豪邸を持っているけれど、そこはナンバー1の奥さんと2人の子供が住んで、椰子林の収益はその生活費である。



クンチャイ家族  
左から二人目がNo.1、その隣が長男  
後が豪邸

ナンバー2は出産に先立って、やっていたレストランをやめてしまったので、クンチャイの収入だけになるのだ。いくら、叔父さんの家に住んでいるとはいえ、今度は赤ちゃんを育てなくてはならない。

まんたんは、どうするのかと、心配だったのだ。

そうして、まんたんの夢は正夢だった。いや、正夢なんてもんじゃなかった。

## タイ 2-40 蓮の花のような女の子

翌日、クンチャイが赤ちゃんを見に行こうと言う。まだお母さんが休んでいなければいけないかと、まんたんは遠慮したのだけれど、結局、出かけた。

ベッドだけのクンチャイのお部屋だけど、赤ちゃんとお母さんは家族の女性陣に囲まれて、とっても元気だった。どこの国でも赤ちゃんはかわいい。赤ちゃんを抱いたお母さんは、輝いている。

ふと気づくと、赤ちゃんは哺乳瓶からミルクを飲んでいる。まんたんはどきとした。昨日の夢の心配がさらに現実的になった。ミルク代が要る！

ワンペンさんはまんたんと同じ年だ。高齢出産だ。母乳も出なくても不思議はない。

クンチャイは幸せそうで、ナンバー2の名前が満月の意味のワンペンさんなので、ロータスという名前をつけたと言っている。満月と蓮の花の因果関係はよくわからなかったが、蓮の花という美しい名前をもらった女の子はまぎれもなくクンチャイの子で、小さいながら、しっかりとらっきょうのような頭をしていた。

帰宅したぶんぶんにまんたんは、今後のクンチャイの生活について考えなくちゃならないのではないかと、相談した。ぶんぶんも、心配していた。「一度、クンチャイと話してみなくちゃなんないなあ」ということになった。



蓮の花のような女の子のその後、確か3歳  
遺伝は強い、のがよくわかります  
そしてよくしゃべる、これも遺伝

## タイ 2-41 驚天の三者会談

というわけで、クチャイを呼んで、食卓テーブルで、まんたん、ぶんぶんと三者会談が行われた。クンチャイは、何事か自分が失敗したのではないかと緊張していたらしい。

ナンバー1と2人の子もいるし、ナンバー2のワンペンさんはレストランをやめたし、赤ちゃんも生まれたし、生活はノープロブレンか、と切り出すと苦情を言われるのかと思っていたらしいクンチャイは、ほっとしてニコニコ。

「ボス、グッド。マダム、グッド。クンチャイ、ハッピー。ノープロブレン」

本当かと、重ねて聞いて、ボスとマダムは驚天した。ノープロブレンドころか、クンチャイは破綻していたのだ。叔父さんの家の食客と化していたのだ。無論、お給料はきちんと支払われていたし、更にまんたんのボディガード分のチップも加わっている。ぷんぷんの会社の海外留学組タイ人の給料には当然、及ばないけれど、ガードマンのクン・ウドンに比べたら倍以上の収入になっているはずなのに。

## タイ 2-42 大ペンライ

それではなぜ？

クンチャイには2つ借金があった。1つは乗ってるヤマハのバイクの月賦の支払い。もう1つはワンペンさんが買ったロッター（宝くじ）の借金を肩代わりしてもらったシスターへの月毎の返済であった。

クンチャイは、バイクの月賦はもうじき終わるし、シスターはとってもいい人で、助けてくれる、で、「マイペンライ」を繰り返す。そのいいシスターへの返済を詳しく尋ねると、マイペンライどころか、大ペンライ。クンチャイは借りた10,000 バーツを肩代わりしてもらって、毎月2,000 バーツ払わなければならないのであった。ざっと年利100%。

ぷんぷんが、いくら説明しても、クンチャイはどんなに高い利息でお金を借りているか理解できない。仕方がないので、そのシスターのところに行って、事実関係を確かめ、先払いすることで、シスターへの支払いをなくしてもらった。

シスターは、クンチャイの姉妹ではない。クンチャイイングリッシュで婦人のことである。あふれるほどにお金持ちのチャイニーズ・タイの雰囲気漂わせたおばあさんだった。おばあさんは、利子は減るし、入るお金が少なくなるので、たいそう不機嫌であった。クンチャイの支払いが滞れば滞るだけ、新しく借金させて儲かるわけなのだ。



真面目なクンチャイ  
初めての選挙投票、名簿チェックで緊張  
いろいろありましたが、いい運転手で、いいガイドで、  
いいボディガードで、いい通訳だったので

## タイ 2-43 クンチャイ再建計画

こうして、クンチャイは無利子で、ぷんぷんに借金をすることになった。ぷんぷんは棒引きにはしなかった。棒引きにすれば、いつもそうしてくれると次々にまた借金をする考えたのだ。

ただし、当分支払いを延期した。というのは、ぷんぷんの工場が完成すると、ぷんぷんは寝る間もなく忙しくなるので、クンチャイのお給料も莫大になるのがわかっていたからだ。そのときに支払ってもらおう算段だった。

まんたんは、クンチャイをファーマーズバンクに連れて行って、クンチャイの口座を開いた。クンチャイの次のボスが誰になるかわからないが、日本に帰国した後、この分では当座の生活にも困るのではないかと積み立てをしてあげることにしたのだ。もちろん、クンチャイにも説明して、通帳もカードもまんたんが保管した。

クンチャイは、涙を浮かべてワイ、あの拝むようなタイ式あいさつをしてくれたが、シスターに払うはずだった利息がどうしても理解できずに、ボスが魔法を使ったような感じだった。クンチャイは、とても頭がいい。勘もいい。しかし、利息の計算は知らなかったのだ。

もうひとつ、地図の見方も知らなかった。

## 第11部 40歳にして振袖を着る

### タイ 2-44 オーシャン・マリーナ

オーシャン・マリーナはパタヤに行く途中にあるホテルで、一度、パーティーがあってから気に入って、よく週末に食事に出かけた。

名前からもわかるように、クルージングに出かけるための個人所有の船舶が繋留してあるところで、ホテル部分と外国人の長期滞在用のコンドミニウムの2つの部分に分かれている。

まんたんとぶんぶんは、最上階のレストランで、絶品のグリーンカレーとレッドカレーを辛さにむせながら食べた。ちょっと辛いのはなんだなあ、というときに頼むオニオングラタンスープやエビのカクテルやパンは、タイ風でなくてこれも結構よかった。



オーシャンマリーナ全景  
パタヤの隣のジョンティエンビーチ  
パタヤより高級感あります



赤いドリンクがシェイクコアハート  
手前のピンクのは忘れてしまった  
まさかシェイクコアパディ？

なぜか、エビのカクテルには、浅葱のような生ネギが3センチほどに切っておてんこ盛りになっているのがふしぎだったが、パンには海草が入っているのや、パリッパリッのパゲットもあって、おいしかった。

トロピカルなフレッシュジュースが何種類かあって、清潔さを心配せずに飲める「シェイク・コア・ハート」というスイカ中心のジュースを、海の上の空にいるような気分でごくごくいただくのは、幸せ~という感じだった。

ただ、お値段も結構だった。

いつもお客はほとんどないのに、料理が出てくるまで長いこと時間がかかって、忘れられたのではないかと心配になるのも、覚悟が要ることではあった。

### タイ 2-45 レディースのパーティー

そのオーシャン・マリーナでパーティーがあると連絡があったときに、まんたんは「もちろん、OKよ」とお返事した。

これが大変な騒ぎになるとは夢にも思わなかった。

今まで、アメリカに行っていた社長夫人のシルビアがタイに戻るので、レディースだけで大きなパー

ティーをするんだという。そのとき、まんたんは、「シルビアは癌なの。手術が終わったから、戻るのよ」と、まるで風邪が治ったかのように普通に語られるのに、ちょっと驚いた。

今は違うけれど、日本人だったらどうだろう。「ちょっと、心配な潰瘍だそうで」というくらいは近い人には自分で言うかもしれないが、どなたかを「あの人癌なの」と言うかなあと思った。言ったとしても、こんなにあっけらかんと自然に言うかしら、心配げな顔付きがセットになるのではないかと思われた。

さて、今回のパーティーは、「なんてインターナショナルな会社なんでしょう」であるからして、各国のナショナルコスチュームのファッションショーになるという。当然、まんたんは「キモノ」をご披露することになった。

アメリカ人はどうすんだと、「大草原の小さな家」風になるのか、カウボーイスタイルになるのかと考えていたら、ずるい。パタヤにある洋服屋さんジャンヤであつらえたタイ・シルクのお洋服で参加するという。

でも、ナショナルコスチュームって、ないのかもなあと、ちょっと気の毒な気もした。



もう登場してしまいました  
ファッションショーの写真  
アメリカ人は普通でしょう  
左から二人目は韓国人、何なんでしょう  
おー、あー、振袖のアップ写真は後ほど

## タイ 2-46 リハーサル

日本人は、パンクチュアルだと言われるが、リハーサルの日、オーシャン・マリナーに定刻 10 時に着いたのは、まんたん 1 人であった。

なにか、計画の中心者が当日の日程表、お仕事分担の案でも持ってきて、全員で検討するのかと思ったら、そんなことはなかった。「ハロー、レディース！」などと言いながら、何となく現れ、何となくバックミュージックはこうね、などといらいらするほどのいい加減さというか、のびのびさなのであった。

まんたんは、「日本人だからわかるよね」と日本製の音響機器の調整を依頼され、日本人だからだなんて、そんなものわかるわけないじゃないかと、仕方ないのでレバーを全部真ん中にしてあげた。マイクが効き、音が出ていれば、問題はないらしく、特に注文もなかった。



まだ無人の会場  
まんたんが見れてくるのはこの奥

ただ、出演者の希望で流されることになった、アジア系太鼓中心の音楽は、一部の人には苦痛であるらしく、露骨に顔をしかめる人がいた。

それと、時間を計るとひとりあたり 2 分 30 秒かかり、ファッションショーだけで 4 時間かかり、これは長すぎると主張したが、「大丈夫よ」と大らかである。ついでにまんたんは「計算機」と言われるようになった。

そのとき、まんたんは、キモ～ノは着ていかなかったんだけど、タイに持っていった汗まみれになってダメになってもいい若いときのもので充分だと思っていた。

これが、リハーサルで間違いだと気がついた。マレーシアやタイや韓国の衣装は恐らく最高級の素晴らしいもので、アクセサリーや宝石の類もここぞとばかり見事なものばかり。中には、ご伝来であろうティアラまであった。「クリスマスツリーみたい」何て言いながら、誇らしげである。

まんたんは、日本に連絡して、振袖と帯を送ってもらい、ついでにヘッド・ドレスに悩み、簪は地味で芸者さんと間違われるといけないので、七五三用の髪飾りを買って一緒に送ってもらうように頼んだ。

日本には、管財人の人と住いの風入れを頼んでいるお向かいの奥さんがいて、これが大仕事なのであった。



インターナショナルショー！  
マレーシア、タイ、フィリピン  
そして世界チャンピオン、イーブン

## タイ 2-47 40歳にして振袖を着る

というわけで、まんたんは振袖を着て、レディースのファッションショーに参加した。

外国だからというので、年配の人が振袖を着るのを、着物のきまりにも反し、いささか見苦しいと思っていたのに、自分でやっちゃったのである。

ジュリーンのアドバイスで、お扇子を手にあちこちのテーブルで、日本式の深々としたお辞儀をすることになった。中には席には立ち上がって同じようにお辞儀をしてくれる人もいた。

「私は異文化日本にも造詣が深いのよ」という気配であった。



お辞儀、貫禄？！

司会者から、「まんたんが身に付けているものはすべて日本の柔らかなシルク。ベルトはオービと言われプラチナの入った織物である。キモ～ノの柄は、春夏秋冬の花の柄である。靴はジョーリと呼ばれるものである」と、あやしいアナウンスがあって、なあんだか日本文化を汚してる感じで後ろめたかった。

イギリス人の奥さんが、触ってもいいかと尋ね、袖をとっては見つめ、「グレイト」と言ってもらってうれしかった。

まんたんの予言したとおり、パーティーは延々6時間に及び、慣れないジョーリの花緒にしばらく足が痛んだ。

その後、キモ～ノを着てというお願いがあって、着るものに困ったまんたんは、タイシルクを36センチ幅に切って、「着物の着付け方」という本の付録にあった浴衣の仕立て方で、着物を縫った。裏も

何もなくごまかして「これが、単というものだなあ」と自分でおかしくなった。

日本舞踊をやっていたので、着物を着ることができたのは助かった。日本でやったお稽古事はすべてとっていいくらい、タイでしか役に立たなかったような気がする。

今でも、パタヤのジャンヤには七五三の髪飾りをつけた珍妙な40歳のまんたんの振袖姿の写真がかかっている。



手製のタイシルクのキモノ  
中味ではなく、外見が着物であれば、もうキモノ

## 第12部 笑っちゃう銅鐸

### タイ 2-48 お誕生日の贈り物

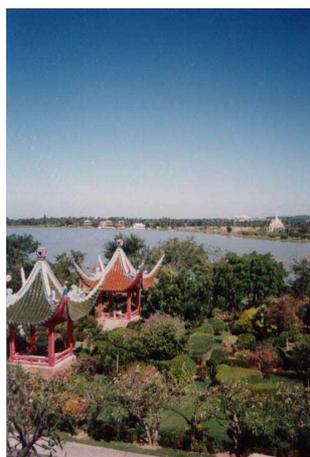
パタヤに出かけた帰り道、クンチャイがお寺に行こうと言う。

う~ん、お寺かあと、乗り気でない雰囲気を感じたクンチャイが、「王さまの60歳のお誕生日のプレゼントに、チャイニーズ・タイの富豪が贈った世界中の建物がある。ビューティフル~」と熱心に勧めてくれるので、半ばお義理の気分で立ち寄ることにした。

何せ、王さまは絶大な尊崇を受けているわけで、クンチャイのお父さんは中国の潮州というところから来た方なわけで、断りにくかったのだ。



こんな建物も、パゴダ？  
観光案内にはワット・ヤン・サンワラン  
ワットはお寺のこと



池の周りにボツン、ボツンと  
見えるのが建物、いっぱい

噴水のあるかなり大きな池のほとりに「世界中の建物」はあり、それなりに世界の国々の感じはしたが、あまり熱意を持って建てられた感じはなくて、例えば日本の建物は池に張り出した法隆寺型の壁のないあずまやで、見ようによってはどの建物もタイ風以外のなにものでもない。

クンチャイに悪いと思って、まんたんとぷんぷんは「タイの人は本当に王さまが好きなんだねえ。立派な王さまなんだねえ。きれいだねえ」と縷々感動を述べたが、ほんとはあまり感動していなかった。

ところが、ところが、それがとんでもない大間違いだった。

### タイ 2-49 淡浮院

池を一周して最後に「中国館」があり、車を降りると、ここだけ入館料がいるという。確か50バーツくらいだったと思う。中国系の人から贈ったから「中国館」だけには力が入っているのだと納得して、ここだけにある門を入ろうとして、まんたんは「あつ」と声をあげた。

門額には「淡浮院 溥傑書」とあった。

溥傑って、あのラストエンペラー溥儀の弟、本当かと疑った目をまん丸にして見ても、間違いはない。溥傑と結婚した



中国館全貌  
やっぱりこれだけでも大きい！  
入館料は日本円で150円、安いかもしれない

日本の嵯峨侯爵家出身の浩さんの著書「流転の王妃」はまんたんも読んでいて、「皇后さまは阿片をお吸いあそばして」という言葉が、敬語はこのように使われるのだと印象深く頭に残っていたし、長女の慧生さんは天城山で心中したと聞いていた。

雄渾ではないけれど、日本人の書とは違う柔らかな品格のある門額は、毛沢東でも周恩来でもなく、溥傑さんのお筆だったのだ。

タイの中国系の人々にとって王さまに贈るプレゼントには溥傑さんの書がふさわしい、何と言ったらいいのか、今にしてなお正統な中国の王朝の後継者は清朝の愛新覺羅家なのかもしれないと、複雑な胸中を思っってはっとした。



入口の上に掲げられた淡浮院の文字  
白地に黒字ではありませんが、流れるような書

## タイ 2-50 嘘でしょう？

正直なところ、チャイニーズ・タイの富豪が、王さまの還暦を祝うといって、お金持ち故に受ける反感を避け、商売上の計算もあって、「ご機嫌とり」にこの贈り物をしたのではないかと失礼なことを考えていた。もちろん、その気配もかなり濃いんだけど、淡浮院は富豪が渾身で集めた個人の宝物の博物館でもあったのだ。

3階建ての1階で、まんたんもぷんぷんも「嘘だろ、これ！」と、信じられないものを見た。大広間の中には、なんとガラスケースに入った兵馬俑の像がずらり並んでいたのだ。確か兵馬俑の像は、原則国外持ち出し禁止のはずでは。偽物かと思ったけれど、どうやらそうではない。

ただただ、呆然とするのみであった。

まずは、華僑系の富の規模が想像を絶するものであること、そして世の中には原則を越える繋がりがあるということ、呆然から回復しながらこの2つを実感していた。



兵馬俑？！  
前も兵馬俑？もっと強いかもしれない。  
1体でよかった。

## タイ 2-51 笑っちゃう銅鐸

1階のメインは、兵馬俑だったけれど、お宝は他にもいっぱいあった。銅鐸である。

銅鐸は日本でもよく見る。銅鐸が何であるか論争もあって、祭祀用の道具であるとか、権威の象徴であるとか、入れ子になっているとか、日本ではまだ謎めいている。

この銅鐸を見て、まんたんもぷんぷんも笑っちゃったのだ。いや、銅鐸は最も古い時代の素晴らしい

ものだったのだが、その展示方法が日本の論争など蹴散らすやり方で、考えてみるとその当たり前さにすっきり、さっぱりして、すう~としたのだ。それは、さりげなく置かれていた。

銅鐸は何個あったろう。てっぺんの輪のところに木の棒が挿されて目の高さに持ち上げられて、左から右に、大きいものから小さいものに、順に並んでいた。ご丁寧に、はじっこには銅鐸を打つ木槌が紐でぶらさげてあり、どう見ても打楽器、少なくとも音階のある鐘であることを示している。中国の人にとっては、ごくごく自然な説明の必要もないことなのであった。

まんたんは、鳴らしたらどんな音がするか、木槌をとってガンガン鳴らしたい強い欲望にとらわれた。ああ、ぷんぷんに羽交い絞めにされなければ、古代の音が聞けたのにと残念でならない。今でも、どんな音がしたろうかと想像する。

## タイ 2-52 泳げる硯

硯は海と丘からなる。くぼんで水が溜まるところが海、墨をすることが丘。まんたんはそう聞いていて、上手の使う硯は丘が平らで、真ん中に墨のすり跡が減っているようなのは下手の証拠で恥ずかしいと教えられた。

田舎の家にも、端溪だというみんなが言い張っているが、怪しい径 30 センチほどの大硯があった。それは、僭越というものであった。淡浮院の大硯は畳 3 畳ほどもあって泳げるかというくらい大きかった。硯はこれくらいにならないと「大」はつかないのだなあと、驚いた。そして海も丘もなく平らで、堀り出された形を生かした上で周囲に彫刻がほどこされていた。

最初これは観賞用のものとしか思わなかった。が、見ているうちに考えが変わった。本物の端溪とかの名硯は、墨などにびくともしない硬さなのではないか。海丘がないことは、適当な濃さになったら墨をするのを止めるという日本式のやり方ではなく、墨すり係みみたいな人がいて墨液を作ったのを、筆書係みみたいな人がいて柄杓かなんかで小分けにして好き好きな濃さにして使ったのではないか。

まんたんの妄想は止まらなかった。

雨畑や熊野や雄勝の掌サイズの硯を持っていて大事にしていたのだけれど、天文学的な値段であろう、あの泳げるような硯を見た後は、度肝を抜かれてがっくりして、ささやかなこだわりは雨散霧消してしまった。

写しではない古文書の類は、硯の脇の本棚にどうということもなく並んでいる。唐三彩も、人丈の大壺も、陶磁器も、平然とあるのであった。

## タイ 2-53 大極紋様のある 2 階

3 階建てのうち、2 階は「道教」風であった。

道教自体が古い起源と長い歴史があって、シャーマニズムや陰陽や易や風水や不老不死やさまざまな神さまや仙人など、何が何だかわからないのだけれど、大極紋様でそれと知れ、祀ってある像は高位の道士だと思われた。大極紋様は、韓国の国旗の真ん中にある巴模様になんか点が付いている感じで、勾玉2つを組み合わせたような陰陽の調和する宇宙を示すめでたい柄で、これが出ると「道教」という印象がある。

不思議なのは、西王母という女神さまが管理する1個食べると、3千年生きるとか不老不死になるとかいう桃や、孫悟空や、閻帝の像もあったことで、とにかくチャイニーズ・タイの人が有難いと思うものがこの階にはまとめてあった。道教というよりは、儒教、仏教以外のすべての信仰の階というべきかもしれない。

あまりの多様さに疲れていると、凄まじい音が近づいてきた。

## タイ 2-54 バルコニーの驚愕

2階には広いバルコニーがあった。何の音だろうと出てみるとヘリコプターであった。それも、オリーブドラブ色の軍用の超大型ヘリコプターである。

なんだ、なんだ、戦争が始まるのか。轟音で近づいてくると凄まじい風圧で、目の前の空き地に着陸したときには、土が舞い上がってきて髪から口からジャリジャリした。

土煙の中、兵隊さんがバラバラと降りてきて散らばった。何事かとクンチャイに聞くと、王室のどなたかが明日ここに来るので、その警護と下検分のために偉い軍人さんが来たのだらうという。

ヘリコプターってトンボの親分のようなイメージがあったが、こんなに騒々しく威力のあるものだとは知って驚いた。そして、王さまご一家は偉いんだなあ、と驚いた。

バルコニーから見えたものにもうひとつあった。遠い山の岸壁にうっすら見える仏像の輪郭である。まだ、建設中だった。



2階のバルコニーから見た景色  
池の周辺の建物が見えます

## タイ 2-55 最上階はやはり

タイと言えば何と言っても仏教である。

2階から3階に昇る階段の壁には、お釈迦さまの生涯が描かれ、さあ、仏さまだぞ、仏さまだぞ、という期待をいやがうえにも高めているのであった。比較するのもなんだが、教会にキリストの生涯図があるのや、古い仏教遺跡に釈迦八相図のレリーフがあったりするの、こういった効果があるからではないかと思った。

たどりついた3階には、もちろん仏像があった。当然、お釈迦さまであるはずなのだが、かなり手抜きと見えて、観音さまみたいにも見えるのであった。日本の仏像の決まりと違うのかもしれない。

クンチャイに教えてもらおうとしたが、だめだった。クンチャイによるとすべからく、「ブッダ」ということになるのである。お釈迦さまも眷属も、お坊さんも、仏教徒も、「ブッダ」なのである。タイ語がわかればなあと思ったが、そのあたりのことまで話せるようになるには一生勉強しても無理な気がした。

それにしても、チャイニーズ・タイの信仰の幅広さには感服するばかりだった。



3階にあった仏像の一つ  
右側が持國天と書いてあると思うのですが

## タイ 2-56 岸壁の仏像

ラヨンへの戻り、バルコニーから見えた岸壁の仏像彫りの現場に寄ってもらった。近くに行くと、ほとんど垂直な岩肌に命綱でつながった大勢の人が張り付いて、坐像を彫っている。完成までにはまだまだというところで、足場もなくかなり危険な作業に思えた。

クンチャイに聞くと、「もう何人も落ちてる。死んだ人もいる。でも、ノープロブレン。ブッダのために死んだのだから」と言う。



左に見える白い三角形が岸壁に仏像のある山

ほんとかどうか。とってプロブレンだと思ふまんとぷんぷんは、顔を見合わせるのであった。

## 第13部 ナーママ発熱/クン・ウドン爆発

### タイ 2-57 送ったお薬

日本を出るとき、お米と薬品は持ち込んではいけないとガイドブックにあったので、まんたんは大使館に日常常備薬もダメかと問い合わせたことはお話しとおりのりだ。

「送って見たらどうですか」という、いい加減ともやさしいとも言うべきお答えに、まんたんは、やったあ、とばかり安売り薬局に駆け込み、頭痛薬やら風邪薬やら咳止めやら胃散やら下痢止めやら傷薬やらをしこたま買い込みました。医者のお父さんに頼んで、抗生物質、鎮痛剤、抗菌剤など病院仕様のお薬も準備した。

ぷんの会社では、「ぷんぷんさんの奥さん、薬1万円分も買ったんだって?」と噂になったけれど、1万円なんてとんでもない。安売り薬局で買った分だけで10万円を越えてた。

大活躍は、セイロ丸。

熱帯性の下痢というのだそうだが、特に生ものや清潔さに欠けるようなものを食べたわけではないのに、慢性的に下痢状態が続く。これは体質にもよるらしいが、多くの日本人は暑い国ではこの状態になる。東南アジアの旅行記などで、屋台であれこれ食事をしておいしかったなどとあるのを見ると、信じられない強靱な胃腸だと思ってしまうのだ。

日本から持っていったものは、何でも貴重です。セイロ丸はなくなりそうで心配(規定量は1日3回、1回3錠)になる。下痢予防的処置として、2人ともあらかじめセイロ丸を毎日1錠ずつ飲むことにした。いよいよ、セイロ丸が心細くなって、パタヤのフードランドのお薬コーナーで、タイ製の下痢止めを求めたが、これが怖いほど効くのであった。

タイで初めて宿泊したアマリエアポートホテルの冷蔵庫の上には、ナッツやチョコレートと一緒にアスピリンが置いてあって、薬事法はどうなっているのだと驚いたけれど、日本のようにお薬は、薬剤師さんのいる薬局でしか売れないというようなことはないらしかった。

### タイ 2-58 ナーママ発熱

夕方、いつものように、息子のナーを連れて洗濯物を届けてくれたナーママの元気がない。大きな目が熱っぽくうるんで、身体もだるそうである。

「ママ、OK?」と言うと、「ノー、ノー」と力なく答える。椅子にかけさせて、体温計で熱を計ると、なんと39度もあった。抗生物質を飲ませるべきかと思ったが、もしアレルギーがあったりするといけないと思い直し、その場でばぶるんと胃散を飲ませ、夜寝る前と明日の朝飲むようにと2セット持たせた。

心配だったので、クンコンに電話して、ナーママの具合が悪いので、明日治っていなかったら、病院に行かせてくれるように頼んだ。

翌朝、ナーママが、例の「クン・マンタン、ママー」と電話を寄こしたので、体温計を持ってフロントに駆けつけると、ナーママは昨日の姿が嘘のように元気いっぱい。熱も35.5度しかない。

よかった、よかった、ありがとう、ありがとうと喜び合っていると、他のスタッフが寄って来た。ナーママがみんなに話し始め、イーブン、イーブンと言っていたので、日本の薬は素晴らしく効く、ついでに日本人のまんたんは親切だと言っているのだと考えることにした。



前にも登場したナー、とナーママ  
やはり、いまだに本名はわからない  
マダムとナーママで通じる、気持ちが大事

実際、それから怪我をしたり、具合が悪いとみんなまんたんのところに来た。まんたんは、日本の薬を惜しんだが、立派に医師法違反、薬事法違反をしたのである。

もしかしたら、タイの人はあまり薬を飲まないで、市販の風邪薬でもよく効くのかもかもしれないとも思った。

## タイ 2-59 ドイツの博士号を持つ女医さん

スターマーケットに買い物に出ようと車に乗ると、いつもにこにこのクンチャイの顔色が冴えない。正確には、クンチャイは顔の色が黒いので、顔色が悪いんだか、いいんだか、よくわからないのだけれど、元気がない。

「クンチャイ、どうした？」と聞くと、「頭が痛い」と言う。これは大変、クンチャイが具合が悪いなんてことは初めてである。スターマーケットの4階には、クリニックがあると聞いていたので、「ノープロブレン、ノープロブレン」と言うクンチャイを引きずるようにしてそのクリニックに駆け込んだ。

先生は女医さんで、「私はドイツで医学博士になった」と壁の賞状のようなものを指して、まんたんに安心するように言う。とにかく、クンチャイは大事な運転手さんで、友人で、こんなことは初めてなので、検査して欲しいと頼み込んだ。

えらく時間がかかったが、クンチャイは熱もなく、レントゲンも異常なく、血圧も正常なので、単なる頭痛だろうというお診立てであった。お薬を出すので飲むようにとのことだった。女医さんは、「クンチャイは暑いイラキで力仕事をしたので、頭痛がおこるようなこともある。あなたは、よいマダムだ」と言う。

まんたんはよいマダムだとしても、何年も前の力仕事が突然のクンチャイの頭痛になるのか若干疑問はあったが、先生にお礼を言った。

Rayong Province <b>10</b>	
<p><b>HEALTH</b> <b>5</b></p> <p><b>Chemists</b></p> <p>For pharmacy requirements, there are quite a few choices. The most convenient would be in the Thai Chang market, right at the back. The chemist speaks good English. If you bring your prescription, the staff will be helpful in supplying it to you. If the item is unavailable, they will find a substitute. Near Khao I-En, you have another choice in pharmacy items, if you are in that area. A member of the Thai language would be helpful.</p> <p>On Sukkravitt in front of the market, there are another two pharmacies where English is spoken.</p> <p><b>Hospitals</b></p> <p>In this little town, there are no private facilities. The nearest place would be Map 4. Thai Hospital, situated 10 km from the traffic lights on the Chang. English is spoken and some doctors have been trained in the United States.</p> <p>However, further south on the Sukkravitt, you have the recently renovated Public Rayong Hospital. Medical staff is very caring and speaks English very well. This hospital is situated on the Sukkravitt. See Map 1a Thai and Rayong sections for Private Hospitals.</p> <p><b>Ban Chang Public Hospital</b> Tel: 05188 50128, 60195 Off Sukkravitt, across from Eastern Star</p>	<p>Place Quad 24 hrs for emergencies. There is limited English spoken. Facility has just been renovated.</p> <p><b>Eastern Star Plaza Prommit Polyclinic</b> Tel: 623009 Located on the third floor of the Eastern Star Plaza.</p> <p>Open daily 1000-2000 hrs. Doctors speak English and German. Laboratory, X-rays, ultrasound, EKG. Oh, Oh, minor surgery and small pharmacy, make him return.</p> <p><b>Veterinary Clinic</b></p> <p>Tel: 601815 Dr. Anonon Off Sukkravitt. Opposite the motorcycle shop, next to the Superstore shopping area. Open daily 0900-1900 hrs.</p>
<b>SERVICES AND SHOPPING</b> <b>6</b>	
<p><b>Department Stores</b></p> <p><b>Eastern Star Plaza</b> Zanyer building located at the west end of Ban Chang on the corner of Sukkravitt and Ban Chang Public Rd.</p> <p>This shopping centre has a wide variety of shops, including fabrics, clothing, bookstere, appliances, bakery, food and pet sporting goods and two restaurants. There are three floors of</p>	
311	

住んでいた所の外国人向け病院紹介  
1ページにもならない!

クンチャイはフランス人のボスとイラキで道路を作っていたのだ。う～ん、フランスはイラキと近かったのか。道路は戦時、滑走路になるというのは多くの国の常識である。なるほどなあ、国家間のことは複雑であるなあ、世界情勢の一筋ならぬ表裏にまんたんが思いを馳せている間に、クンチャイのお薬ができあがり、その場で1回分飲ませた。

ぷんぷんを乗せてクンチャイが帰ってきた時、入口で待ち構えていたまんたんが、ぷんぷんに事情を説明すると、ぷんぷんはクンチャイに、「おいしいものを食べて力をつけなさい」とチップを奮発していた。あつけにとられたまんたんにぷんぷんは、「クンチャイにはお薬じゃなくて、お金が必要だったのかもしれないよ」と笑うのであった。

クンチャイはその後、お薬を飲もうとしなかった。眠くなるからいやなんだと言った。釈然としないまんたんであった。

## タイ 2-60 クン・ウドン爆発

車に乗って、さあ出発というところで、クンチャイがわけのわからないことを言い出した。

「クン・ウドン、プロブレン。バーン、バーン」

「クンチャイ、わからない。ガードマンのクン・ウドンが、バーン、バーン？」

クンチャイは自分の足を叩いて、「バーン、バーン」と言う。

わけがわからないのはまんたんであるのだが、何事だろう。クン・ウドンは見送ってくれたばかりだけど、銃撃戦でもあって足に被弾したのであろうか。まさか、クン・ウドンが爆発しちゃったなんてないよねえ。

「クンチャイ、プロブレンなの？」と聞くと、「プロブレン、プロブレン」とほっとした顔をする。

気になって、道路に出るところだったのだけど、戻ってもらった。クン・ウドンは建物の入口で警備にあたっていたが、クンチャイが話をするとズボンの裾をまくりあげた。まんたんは、クン・ウドンの弁慶の泣き所を見て、びっくりした。大きな腫れ物ができて、化膿して白い膿で盛り上がっている。確かにこれはバーンと爆発するのは時間の問題だ。

これは外科的に切開してもらうのがいいのではないかと、クン・ウドンにクリニックに行くように言った。いや、クンチャイに言ってもらった。お薬はあるけれど、前回のクンチャイの一件もある。クンチャイがクリニックに行ったときの費用と同じくらいのお金を渡した。

翌日、クン・ウドンがクリニックに行ってきたという。見せてもらおうと、花柄の洋服の切れ端がぐるぐる巻いてあった。クンチャイはまんたんのいぶかしげな顔を察して、「ノープロブレン。ウドンは近くのナースのいるクリニックに行ったんだ」とフォローに努める。

まんたんはタイの医療機関について考察した。英語も通じるバンムングラホスピタルのような病院、クンチャイのナンバー2 が出産したラヨンホスピタルのような総合病院、スターマーケットでクンチャイが診てもらった個人病院のクリニック、この他におそらくは医師資格も看護資格も無い無認可の

療治所みたいのがあるのであろう。

クン・ウドンは4人の子持ちで、ご飯を2人前食べるのだった。渡したお金は、クン・ウドンの食費か、ウドン家の生活費になって、腫れ物の方は療治所に行ってこの汚い布を巻いてもらったのであろう。気持ち落ち込んだ。あれが爆発して全身症状なんか起こしたら、ウドン一家の生活はどうなると思ってるのかと、がっかりした。

部屋に戻って、貴重なくっつかない傷当てシートと貴重な伸縮包帯と貴重な抗菌軟膏と貴重な飲用抗菌剤と貴重な胃散をクン・ウドンに渡して、手当ての方法をクンチャイに伝えてもらった。驚くべきことに数日で、クン・ウドンの傷は完治した。不思議だが、やはり薬などあまり用いない人には、劇的に薬が効くような気がした。

これで終わったのではなかった。

しばらくして、今度はクン・ウドンの女の子が「バーン、バーン」になったと言うのだ。クンチャイに頼んで、ウドン家を訪問した。クンチャイはウドン家の場所を知っているのがちょっと謎で、もしかしたらクンチャイはクン・ウドンの帰宅の際に送っていったことがあるんじゃないかしらなどと疑いたくなった。道路から水溜りのあちこちにあるがたぼこ道に入って、人丈の草に囲まれた簡素なウドン家があった。

まだ、赤ちゃんのような小さな女の子は、父親と同じようなおできができていて、もうすでに破れて熱も出ていた。水溜りから発生するのか、大きなトンボのような蚊が飛んでいて、おそらく、蚊にさされた痕にばい菌が入って化膿するのではないかと思った。タイの都市部に（一応ラヨンだって都市部）マラリアはないというのは嘘だ。

まんたんは、骨が見えるようなのを何で放っておく、除草剤を撒け、水溜りに消毒薬をかける、誰か何とかしろと、泣きました。このときから、まんたんは、薬品による自然破壊を云々する気も資格も失ったわけである。

女の子のために、お金ではなく、父親にあげたと同じ治療セットを置いてきた。世界の病気の人を救おうなどというのは、つくづくと大それたことだと思った。身の回りの何人かを救えたら上出来なのだと思った。そして、子供をかわいそうにと思ったけれど、貧しい家族があって食べるにも事欠くような場合、生き延びそうな者から生きようにするのが仕方のないことなのだと、その厳しい自然さに愕然とした。女の子が医師の治療を受けるお金があったら、他の家族が生きるための食費になるのである。



クン・ウドン  
クンは敬称なので苗字がウドン  
タイ人としては体格がいい  
爆発したらどうなるんだろう

## タイ 2-61 コーラはいらない

スターマーケットに出かける未舗装の道をクンチャイとまんたんは、相変わらずの上天気の中を車を走らせていた。

すると、道路の右端を座ったまま歩いていた人がいた。何だろうと後部窓から振り返ってみたが、や

はり座って歩いているのである。往きは、そのまま通り過ぎたけれど、同じ道を帰るときにも、その人が座って歩いている。

まんたんは、車を停めてもらった。座って歩くって、どのようなことかと疑問に思われると思う。地面に腰を降ろして、両足を前に延ばして、両手を腰の後に回して身体を支え、お尻をすりながら手と足で前に進むのである。焼けた地面は気温よりさらに高い。その土の道を、その方法で進むのである。

びっくりして、「この人は病気だ。病院に連れて行く」と言うと、クンチャイが通訳してくれた。「病院には入っていた。交通事故で、病院で手術した」という。まんたんが、なおも治っていないじゃないかと言ひ募ると、何となく察したらしいその人が、いきなりシャツの前を開けた。彼の胸からお腹にかけて確かに長い手術跡があった。

よくよく聞くと、いくら入院しても治らないので、お寺に相談に行ったら、お坊さんが「歩いてシラチャの街まで行くと治る」と言ったというのだ。

「そのブッダは悪いブッダだ。こんな暑いところを体の悪い人を歩かせるなんて、死んでしまう。私が、そのブッダに会って間違ってると言ってやる」と、怒りに身体を震わせながら言うと、クンチャイは驚いて「そうじゃなくて、ブッダにシラチャまで歩くから治してくれるようにこの人が言ったのだ」とあわててとりなした。

ああ、願かけをしたのか。クンチャイのとりなしをそのまま信じたわけではないのだけれど、手術と入院におそらくは経済的にも耐えられず、生活もできなくなって、こうしてタイ版「お遍路さん」をしているのかと納得した。

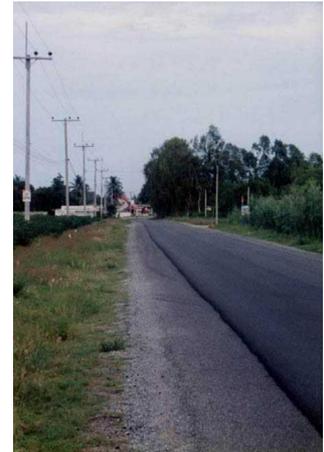
どういうわけか、自分でもわからない。まんたんは、その人を見ているうちに自然に合掌して拝んでしまった。「あなた、仏さまだ。生き仏さまだ」とワーワー、大声で泣いた。慣れてきたとはいえ、緊張の日々にふと気が緩んで気持ちがあふれ出したようだった。

近くの人も寄ってきて、めったにないパトカーも止まってお巡りさんも出てきた。

クンチャイがしゃべり続け、みんな「オー、オー」と言っている。泣きながら、まんたんが買い物してきた中からコーラを渡そうとすると、「コーラはいらない。水がいい」とその人は言う。ミネラルウォーターを渡し、ハンカチで汗をぬぐってあげて、まんたんの帽子をかぶせた。その人は、「コップンカー」とお礼を言いながら、丁寧にワイをしてくれた。

あっ、そうだと、1,000 バーツ渡そうとすると受け取らない。500 バーツでいいと言う。たくさん、お金を持っていると泥棒に襲われるというのだ。1,000 バーツで襲われて、500 バーツだと襲われないというのが謎だ。

車で送ろうかという、歩かないといけないのだとことわる。その人は、夕焼けで燃えるような道を



違う道路ですが、きっと舗装道路も行かなくてはならないし、アスファルトの照り返しで本当に暑い木陰すらない



違うときの写真だけど、きっとまんたんはこんなになって騒いでいたと思うタイ人からみたら、仏陀に見えたのはまんたんのような気がする

まんたんの帽子を被ってシラチャに出発した。

おしゃべりクンチャイがぶんぶんに黙っているはずがない。帰ってきたぶんぶんは、ニヤニヤしながら、「マダムが大泣きしたんだって？マダムは仏さまに会ったんだって？」と言った。

ぶん、タイにいるとき、泣いたのは3度きり。1回はラヨン女学院で、2回目はクン・ウドンのことで、3回目はこれだ。

自慢じゃないが、自分が辛くて泣いたことはないんだぞ。でもね、まんたんはあの時、やっぱり仏さまを見たんだ。

今でも夕日の中をあのおじさんが、シラチャに向かって歩き続けているようなそんな気がしてならない。



巨人ではありません  
パタヤのミニチュア建物の公園で  
タイでは帽子は必需品  
かぶせてあげた帽子はこれ？

## タイ 2-62 頭のレントゲン

いつごろからか、まんたんは咳が出るようになって、最初はそんなにひどくなかったのだけれど、話すともまらなくなって、レディースに「お大事に」と言われるようになった。英語を話すと咳が出る病気かなんて笑っていたのだけれど、秘かに心配していることがあった。

咳止めや風邪薬でも止まらない。確かに、日本で言われるように空気がきれいではない。排気ガス規制なんてものはないのだから、通りは青々と煙っているくらいだ。それも理由だろうけど。まんたんが案じたのは、結核であった。もちろん、子供のときからツベルクリンのお注射をやっていた世代だけれど、この国ではまだまだ罹患者が少なくないだろうと思う。

意を決して、バンムングラ病院に出かけた。先生は、いきなり、「Xレイフィルム」と言う。ああ、やっぱり結核の恐れがあるのだろうか、と、気落ちしてレントゲン室に行くと、まあ、当然ながら胸の写真を撮った。が、続いて頭の写真を撮るといふ。レントゲンの技師の人になぜ、頭の写真を撮るのか聞くと、お医者先生の指示だという。狐につままれたような気分ではあったが、撮ってもらった。

結論からいうと、結核ではない。お風邪さんの咳だろうということだった。ほっとしながら、なぜ、頭のレントゲンを撮ったのか聞くと、「鼻の癌がないか撮った」というお返事だった。

山ほどお薬をもらって帰って、ぶんぶんは頭のレントゲンの話をすると、「頭が悪いのではないかと先生が心配したのではないかとぎゃはぎゃは笑った。あまりにもたくさんのお薬だったので、日本にファクシミリを送り、見解を聞いてみた。お薬は極めて良いもので心配ないが、量が多すぎる。日本での投薬の倍量以上だ。半分だけ服用するようにとのことだった。

まんたんは、半分だけお薬を飲んで治った。

## タイランドエッセイ 第2巻 改訂第2版

---

2005年10月29日 第1版第1刷発行  
2006年5月6日 改訂第1版第1刷発行  
2006年10月6日 改訂第2版第1刷発行

著者： 青沼 祐子  
編集： 青沼 修司

発行： SANDY Office  
Yokohama, Japan

印刷： SANDY Office  
製本： SANDY Office

Printed in Japan  
Copyright © 2006 SANDY Office

本書の内容を無断で転記、転載することを禁じます。